

岐 阜 大 学

留学生センター紀要

2017

岐阜大学 日本語・日本文化教育センター
(旧 留学生センター)

岐阜大学留学生センター紀要

2017

| | | |
|-----|---------------------------|---|
| 巻頭言 | 森 田 晃 一 (日本語・日本文化教育センター長) | 1 |
|-----|---------------------------|---|

論文編

【研究論文】

岐阜の地芝居の足跡

| | | |
|------------------------|---------|---|
| —『岐阜日日新聞』明治前半期記事の渉猟から— | 土 谷 桃 子 | 3 |
|------------------------|---------|---|

【授業報告】

中級日本語学習者を対象とした口頭表現授業

| | | |
|---------------|---------|----|
| —「口頭表現C」授業報告— | 田 辺 淳 子 | 19 |
|---------------|---------|----|

中級日本語学習者を対象とした作文授業

| | | |
|---------------|---------|----|
| —「文章表現C」授業報告— | 秋 山 容 子 | 29 |
|---------------|---------|----|

年報編 (2017年4月～2018年3月)

| | |
|------------------|----|
| 1. 日本語研修コース | 39 |
| 2. 日本語・日本文化研修コース | 52 |
| 3. 日本社会文化プログラム | 54 |
| 4. 全学共通教育 | 55 |
| 5. 年間行事 | 56 |
| 6. 交流ラウンジ | 69 |

資料

| | |
|----------|----|
| 岐阜大学留学生数 | 72 |
|----------|----|

巻頭言

日本語・日本文化教育センター長 森田 晃 一

2018年4月1日留学生センターは、学内共同教育研究支援施設としての部局の位置づけから離れ、日本語・日本文化教育センター（略称：日文センター）と改称し、本学の国際化拠点であるグローバル推進本部内の一組織となりました。

そもそも本学の国際交流の本格的な歩みは、1981年に国際交流委員会が発足したことに端を発します。その3年後には学内措置として国際交流室が設置され、1995年には国際交流室を国際交流センターと改めています。留学生センターは、その翌年の5月に省令施設として設置されたもので、以来21年11か月、業務を多様化させながら活動してまいりました。全国の各大学に設置された留学生センターは、国立大学法人化を期に、それぞれの大学の国際化の実情に合わせて、その業務・名称等を変化させています。本学も、2年ほど前から国際・広報担当の理事・副学長との間で、センターの将来構想について検討を重ねてまいりまして、このたび上記のような組織改編に至った次第です。

日本語・日本文化教育センターが位置づくこととなったグローバル推進本部は、国際・広報担当理事・副学長が本部長を務める学長直属の組織で、本学の国際化のため、また地域社会のグローバル（グローバル+ローカル）化に貢献するため、さまざまな施策を進めています。グローバルの社会的・文化的な意味は、グローバル化とローカル化は同時かつ相互に影響を及ぼし合いながら進行するということですが、本学グローバル推進本部では、本部長のもと、センター長が副本部長となり、センター教員が国際協働教育推進部門・国際交流推進及び国際交流 IR 部門（ワーキンググループ）・留学基盤教育推進部門の3部門にも出動し、部門メンバーとして種々の活動も行いながらグローバル化に努めています。

このような組織改編の重要な点は、センターの中核業務が日本語と日本文化の教育研究であるということを確認し（ミッションの再定義）、それを実質的に表す名称に変更したことにあります。今後センターは、次世代の国際社会を担う優れた人材を育成し、国際教育の充実及び向上のための調査研究と実践を行い、本学並びに地域社会の国際化（グローバル化）に貢献することを目的に、次のような業務を推進してまいります。

- (1)外国人留学生に対する日本語・日本文化教育
- (2)日本人学生に対する国際理解教育
- (3)多文化交流機会の提供
- (4)外国人留学生の受入れ
- (5)地域自治体等との連携事業

さらに2017年度後半から、本学では「留学生就職促進プログラム」が始動いたしました。これは、愛知県・岐阜県の大学、地方公共団体、経済団体及び企業支援団体が連携し、地域内への留学生の就職をサポートする仕組みのことです。大学としては名古屋大学・名古屋工業大学・名城大学、ここに本学も加わり、行政は愛知県・岐阜県、そして両県の多くの経済団体及び企業支援

団体という多くの機関が、「愛岐留学生就職支援コンソーシアム」を構成し協働しています（2017年度に文部科学省委託事業として、名古屋大学を主幹校として採択されたもので、2018年度から本格化し、2021年度まで5年間の予定）。このプログラムでは、ビジネス日本語・キャリア教育・インターンシップの3本柱を強化・発展させ、地域内での留学生の就職を推進する計画となっています。私ども日本語・日本文化教育センターも、従来の日本語研修コースに、新たに留学生の就職支援のための日本語教育を加え、さらに本学の日本語・日本文化教育を充実させてまいります。

本紀要は、論文1編、授業報告2編、年報と資料を構成内容としています。論文・授業報告をご執筆いただいた3名の先生方、年報と資料を取りまとめたくださった編集委員の皆さんに感謝いたします。

論文編

岐阜の地芝居の足跡

- 『岐阜日日新聞』明治前半期記事の渉猟から—……………土谷桃子 3
- 中級日本語学習者を対象とした口頭表現授業
- 「口頭表現C」授業報告—……………田辺淳子 19
- 中級日本語学習者を対象とした作文授業
- 「文章表現C」授業報告—……………秋山容子 29

岐阜の地芝居の足跡

— 『岐阜日日新聞』 明治前半期記事の渉獵から —

Newspaper articles of *Ji-shibai* (Kabuki performed by local people)
in Gifu prefecture in the early Meiji era

土 谷 桃 子

要旨：

地芝居（地歌舞伎とも）は、その地域の人々が自ら演じて楽しむ歌舞伎である。岐阜県は、現在でも全国的に見て地芝居が盛んな地で、2015年からはそれを外国人誘客にも活かそうと試みている。このような現在に通じる岐阜の地芝居文化にどのような背景があるのかを、明治20年代までの『岐阜日日新聞』に掲載された記事を手がかりに考察した。まず、明治20年代までの同紙から地芝居関係の記事を抽出したところ、344点に上った。次に、それらを地域別、座名別に整理した。その結果、地芝居が盛んとされる東濃のみならず、岐阜市域にも芝居を楽しむ若者達がいたことが分かった。その例として、当時岐阜伊奈波の地に存在した国豊座・末広座における地芝居興行にまつわる事柄を紹介した。また、地芝居に対して否定的な見解を示す記事の多さが顕著であることも指摘した。例えば、地芝居は児童に悪影響を与える、災害後に芝居をするとは何事だ等の記事である。なぜこのような記事が多く書かれたのか、実例を紹介しつつその背景を考察した。最後に、地芝居という素材は、研究のみならず教育面でも魅力的であるという私見を述べた。

はじめに

筆者は以前、岐阜市の伊奈波神社近くに存在した末広座・国豊座という芝居小屋について論考をまとめた（「岐阜の伊奈波の芝居小屋—末広座と国豊座—」『岐阜大学留学生センター紀要2014』2015.7、「岐阜の伊奈波の芝居小屋(2)—末広座と国豊座—濃尾地震後の再築・再興—」『岐阜大学留学生センター紀要2015』2016.7）。その調査の過程で多く利用したのが『岐阜日日新聞』（現在の『岐阜新聞』の前身）であったが、そこに村芝居・地狂言・素人芝居等¹⁾の記事が極めて頻繁に現れることに、純粋な驚きと興味を感じた。いずれはこの件についても考えたいと、記事を抽出し続けている。本稿では、その一部を活用して、岐阜市域での地芝居の実例、紙上に現れた地芝居に対する評価について述べる。

1) 本職の役者ではない土地の人々が演じる芝居については、地歌舞伎・地芝居・村芝居・農村芝居等の名称が使われるが（例えば、後述する岐阜県の場合は地歌舞伎（*Ji-Kabuki*）を使用）、本稿では、先行研究に倣い「地芝居」を用いる。引用文献中の素人芝居等の語もおおよそ同義である。

1. 岐阜県における地芝居の現状と先行研究

筆者の調査報告の前に、現在の岐阜県における地芝居の熱気と勢いを帯びた状況を紹介する。岐阜県は、平成27年度（2015）より「地歌舞伎と芝居小屋」を活用した外国人誘客事業を開始している（平成27年9月10日（木）岐阜県発表資料「「地歌舞伎と芝居小屋」を活用した外国人誘客事業がスタートします！」、観光企画課担当²⁾。これは、21年度（2009）に「岐阜の宝もの³⁾」として認定された「東濃地方の地歌舞伎と芝居小屋（恵那市・中津川市・瑞浪市）」を、観光の目玉のひとつにしようという試みである。30年度（2018）現在も、同取組みは継続されている。毎年各地域で行われ続けている定期公演に地域外からの観客を呼び込む試み、外国人観光客が滞在する高山や恵那のホテルや人気の観光地馬籠等での出張公演、英語での観劇指南を組み込んだプログラム開発、日英両語のパンフレット作成、毎年複数の地歌舞伎保存団体がぎふ清流文化プラザ（岐阜市）で公演を行う「地歌舞伎推進プログラム」の実施と「東京2020参画プログラム⁴⁾」認定など、約3年という短い期間ではあるが、さまざまな取組みが展開されている。詳細は岐阜地歌舞伎ツーリズム事務局ホームページ（<https://www.jikabuki.net/>）を参照されたい。

もともと岐阜県は地芝居が盛んな地で、現在全国で約200ある地域の歌舞伎保存会のうち、30団体が岐阜県である⁵⁾。県内には、明治期以前創建の芝居小屋が8つ現存している⁶⁾。それらは存続の危機に見舞われることがありながらも、地域の人々の尽力によって守られてきている。

2) 同発表資料の本文は以下の通りである。「県では、本年度からの新たな取組みとして、「岐阜の宝もの」である「地歌舞伎と芝居小屋」を活用した県内への観光誘客促進を目的に、地歌舞伎定期公演への受入や、特別公演・出張公演の実施など、年々増加する外国人観光客をメインターゲットとして、県内各地で順次展開していきますので、お知らせします。」注1で言及したが、岐阜県は「地歌舞伎」を名称として用いている。

3) 「岐阜の宝もの」とは、岐阜県が認定した、全国に通用する、ふるさとの誇りとなる地域資源である。平成30年度（2018）当初現在、全6点が認定されている（http://www.pref.gifu.lg.jp/sangyo/kanko/kanko-shinko/sl1334/g_takara.html、20180403確認）。

4) 同プログラムは、(公財)東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会が推進する文化プログラムで、2020東京オリンピック・パラリンピックを盛り上げるのにふさわしい全国各地のイベントが認定されている。

5) 安田文吉・安田徳子『ひだ・みの地芝居の魅力』（岐阜新聞社、2009）、p.10。なお、平成29年度（2017）刊パンフレット「岐阜の地歌舞伎」（<https://www.jikabuki.net/pamphlet/>、20180403確認）に掲載されている岐阜県内の団体は、以下の26団体である。

明智町歌舞伎保存会、東座歌舞伎保存会、飯地五毛座歌舞伎保存会、揖斐祭り子供歌舞伎保存会、恵那歌舞伎保存会、加子母歌舞伎保存会、可児歌舞伎同好会、岐阜歌舞伎保存会、申原歌舞伎保存会、気良歌舞伎保存会、坂下歌舞伎保存会、佐見歌舞伎公演実行委員会、高雄歌舞伎保存会、垂井曳軸保存会、東濃歌舞伎中津川保存会、常盤座歌舞伎保存会、白雲座歌舞伎保存会、東白川村歌舞伎保存会、東野歌舞伎保存会、飛騨市河合町歌舞伎保存会、蛭川歌舞伎保存会、鳳凰座歌舞伎保存会、三郷歌舞伎保存会、美濃歌舞伎保存会、村国座子供歌舞伎保存会、山岡歌舞伎保存会

他に、安岐歌舞伎保存会、乙原歌舞伎保存会、上矢作歌舞伎保存会、白虎台組子供歌舞伎保存会がある（『ひだ・みの地芝居の魅力』、『岐阜県の地歌舞伎ガイドブック』（岐阜女子大学地域文化研究所、2009））。

6) 岐阜地歌舞伎ツーリズム事務局発行のパンフレット「日本一！岐阜の地歌舞伎」（2017.3）による（岐阜県地歌舞伎保存振興協議会監修）。同パンフレットには、昭和26年（1951）築の五毛座（恵那市）を含む9つの小屋が掲載されている。

鳳凰座（下呂市）移築再建：文政10年（1827）（明治16年（1883）に観客席増築）
 村国座（各務原市）創建：明治10年（1877）頃
 東座（加茂郡白川町）創建：明治22年（1889）
 白雲座（下呂市）創建：明治23年（1890）
 常盤座（中津川市）創建：明治24年（1891）
 かしも明治座（中津川市）創建：明治27年（1894）
 相生座（瑞浪市）創建：明治28年（1895）、移築再建：昭和51年（1976）
 蛭子座（中津川市）創建：明治34年（1901）、移築再建：昭和24年（1949）

現存芝居小屋の創建が明治20年代に相次いでいることが分かる。筆者が『岐阜日日新聞』の地芝居の記事の多さに目を見張ったのもこの時期である。当時の岐阜では、地芝居がどれほどの熱さで演じられ、観られていたのか。今はただ情報の断片として筆者の前にある記事の数々は、並べ替え、分析することによって、何かを示してくれるかもしれない。

全国的に見ても盛んな岐阜の地芝居については、頼りになる先行研究がある。その一端を紹介する。全体を見渡すには『岐阜県の地芝居ガイドブック』（岐阜女子大学地域文化研究所、2009）⁷⁾が適しており、村国座改修に際して連載された新聞記事をまとめた『ひだ・みの地芝居の魅力』（安田文吉・安田徳子、岐阜新聞社、2009）も詳しい。大判の『みのの地歌舞伎』（小栗克介・近藤誠宏、岐阜新聞社、1999）は、写真も充実しており視覚資料としても有用である。最近では、衣裳に焦点を当てた『ぎふ地歌舞伎衣裳』（小栗幸江、岐阜新聞社、2015）がある。また、県内の市町村史でも、地芝居・農村歌舞伎・地狂言等の項目が立てられていることも珍しくない。それらの記述も大いに参考になる。

観光という視点からの出版物も近年出ている。『大人の学び旅2 地歌舞伎を見に行こう』（産業編集センター、2017）には、長野県大鹿村、香川県小豆島とともに岐阜県美濃の「東濃歌舞伎」が紹介されている。新幹線車内やJR駅構内で販売されている雑誌『ひととき』2016年9月号では、「美濃・飛騨 歌舞伎遊山 日本一、芝居に熱い！」という特集が生まれ、作家の松井今朝子が文章を綴っている。このように、研究対象としてのみならず、現代人も魅了する観光資源としても、力強い魅力をたたえているのが地芝居なのである。

2. 記事渉獵

本稿で資料として用いた『岐阜日日新聞』は、明治14年（1881）2月19日創刊の地方紙で、現在の『岐阜新聞』の前身に当たる⁸⁾。岐阜県図書館蔵マイクロフィルム資料および岐阜市立図書館データベースでの閲覧が可能である。筆者は、岐阜県図書館マイクロフィルムを所蔵初号から

7) 本書の内容は、同研究所のインターネットサイトでも閲覧可能である（<http://www.gijodai.jp/chibunken/chishibai/>、20180403確認）。

8) 『国史大辞典』（ジャパンナレッジ）による。『岐阜日日新聞』にはさらに前身がある（明治12年（1879）11月3日創刊『岐阜新聞』）。他にも『岐阜新聞』を名乗ったものがいくつか存在する（明治6年創刊、同7年1月4日創刊、同8年3月8日創刊）が、それらは別紙である。

明治29年（1896）まで確認し芝居関係記事を抽出、その後同様に岐阜市立図書館データベースで欠号部分を補った⁹⁾。記事は、地芝居に限らず、江戸や上方からの大物役者の来岐、名古屋での興行の様子など、芝居に関連するものを広く拾った。

抽出した芝居関係記事のうち、地芝居に関連して地域が判明するものは、344点であった（ひとつの記事中で複数地域の地芝居に言及がある場合は、それぞれを1点に数えた）。まず、このデータの地域的に概観する。また、現存する小屋以外にも、座名を与えられていたものが散見されるため、それらも列挙してみる。

3. 記事データ整理

○ 地域

収集データ344点の地域別の整理を試みた。地域の記載は、村レベルまで記述してあるもの、郡レベルまでしか記述されていないもの、さらに大雑把に「東濃」のような地方レベルのみ示したのものがある。まず、詳細な地域が記載され現住所と対応させられた283点を表1に示す（現在の市・郡まで判明したものは、詳細地域不明として表に含めた）。記載は地名五十音順である。

【表1：現市町村名判明分】283点

| No. | 現市・郡 | 記載点数 | 詳細地名 |
|-----|------|------|--|
| 1 | 安八郡 | 2 | 神戸町1、輪之内村1 |
| 2 | 揖斐郡 | 2 | 池田町1、大野町1 |
| 3 | 恵那市 | 12 | 明智町2、岩村町2、笠置町1、串原2、三郷町1、山岡町2、長島町1、中野方町1 |
| 4 | 大垣市 | 6 | 青墓町1、赤坂町1、荒川町1、上石津町1、墨俣町1、不明1 |
| 5 | 海津市 | 4 | 平田町3、南濃町1 |
| 6 | 各務原市 | 20 | 上中屋町1、鷺沼1、各務4、川島1、下中屋町1、須衛3、蘇原4、那加3、成清町1、三井町1 |
| 7 | 可児郡 | 11 | 御嶽町2、同上之郷4、同中5 |
| 8 | 可児市 | 11 | 今渡2、大森3、塩1、二野1、羽野1、久々利2、谷迫間1 |
| 9 | 加茂郡 | 23 | 川辺町3、坂祝町1、白川町3、富加町1、東白川村10、八百津町5 |
| 10 | 岐阜市 | 52 | 茜部2、芥見9、伊奈波18、大洞1、雄総1、加納1、蔵前3、小西郷1、白木町1、長良3、野一色1、美殿町3、日野1、美江寺町1、柳ヶ瀬5、不明1 |
| 11 | 郡上市 | 14 | 八幡町7、美並町2、大和町1、和良町4 |
| 12 | 下呂市 | 21 | 小坂町1、金山町15、宮地3、焼石2 |
| 13 | 関市 | 8 | 上之保2、肥田瀬2、戸田1、武芸川町2、吉田町1 |

9) 明治29年までの岐阜県図書館蔵マイクロフィルムの欠号は、明治14年、15年7月11日まで、16～18年、19年5月以降、20年1月24日まで、同3～5月、21年5～10月。

これらの欠号のうち、岐阜市立図書館デジタルデータで補完できたのは、明治15年2月21日、同4月29、30日、同5月2～4、13、21、25、26、31日、16年4～6月、17年4月23日、同12月24日、18年4月8、16、18日、同6月11、14日、19年5～12月、20年1月5～23日、同3月15日～5月、21年5～6月、同8月17日。

| | | | |
|----|-------|----|--|
| 14 | 高山市 | 11 | 一之宮町1、上宝町1、丹生川町7、久々野町1、不明1 |
| 15 | 多治見市 | 4 | 喜多町1、不明3 |
| 16 | 土岐市 | 12 | 泉町3、曾木町1、駄知町2、土岐津町3、飛驒町2、不明1 |
| 17 | 中津川市 | 25 | 阿木1、加子母3、駒場1、坂下4、下野1、田瀬1、付知町7、手賀野1、苗木2、茄子川1、蛭川1、福岡町1、不明1 |
| 18 | 羽栗郡 | 12 | 笠松町12 |
| 19 | 羽島市 | 2 | 竹鼻町2 |
| 20 | 飛驒市 | 2 | 神岡町2 |
| 21 | 瑞浪市 | 15 | 明世町4、稲津町4、釜戸町・大湫町1、河戸町1、土岐町1、日吉町1、唐栗1、巢南町1、宮田1 |
| 22 | 美濃加茂市 | 2 | 山之上町2 |
| 23 | 美濃市 | 8 | 大矢田1、神洞1、藍見2、極楽寺1、上有知1、中有知2 |
| 24 | 本巣郡 | 2 | 糸貫町2 |
| 25 | 山県市 | 1 | 高富1 |
| 26 | 養老郡 | 1 | 養老町1 |

上記283点のほかに、郡名や「東濃」のような地域名のみ示されたものが61点ある。郡名は、現在と当時とで区割りが異なり、現在の同名の郡や市が当時の郡の範囲と一致しない場合がある。表2の郡名は当時のものである。

【表2：郡名・地域名のみ記載分】61点

| No. | 郡・地域 | 記載点数 | No. | 郡・地域 | 記載点数 |
|-----|------|------|-----|------|------|
| 1 | 厚見郡 | 2 | 9 | 羽栗郡 | 1 |
| 2 | 恵那郡 | 9 | 10 | 益田郡 | 2 |
| 3 | 大野郡 | 1 | 11 | 武儀郡 | 6 |
| 4 | 各務郡 | 1 | 12 | 本巣郡 | 1 |
| 5 | 可児郡 | 5 | 13 | 吉城郡 | 2 |
| 6 | 加茂郡 | 4 | 14 | 飛驒高山 | 5 |
| 7 | 郡上郡 | 7 | 15 | 西濃 | 2 |
| 8 | 土岐郡 | 4 | 16 | 東濃 | 9 |

○ 座名

『岐阜日日新聞』明治29年（1896）までの地芝居関連記事に現れる芝居小屋の座名を列挙する。記載は座名五十音順である。

【表3：座名一覧】

| No. | 座名 | 場所（現住所） | 出現回数 | 掲載年月日 |
|-----|---------|---------|------|--|
| 1 | 愛盛座 | 大垣市 | 1 | M21.6.27 |
| 2 | 旭座 | 岐阜市芥見 | 1 | M29.4.30 |
| 3 | 朝日座 | 関市吉田町 | 1 | M29.8.26 |
| 4 | 東座 | 下呂市金山町 | 1 | M28.10.6 |
| 5 | 泡雪座 | 岐阜市柳ヶ瀬 | 1 | M25.5.6 |
| 6 | 泉座 | 岐阜市美殿町 | 3 | M26.5.6, 26, M29.5.29 |
| 7 | 榎本座・榎元座 | 多治見市 | 3 | M24.12.23, M26.4.18, M28.3.28 |
| 8 | 国豊座 | 岐阜市伊奈波 | 10 | M19.6.9, 6.23, M20.2.17, 26, M22.10.12, 26, 11.3, 22, 28, 30 |
| 9 | 寿座 | 岐阜市柳ヶ瀬 | 1 | M26.6.15 |
| 10 | 末広座 | 岐阜市伊奈波 | 8 | M26.4.18, 26, 5.6, 6, 18, 6.15, 29, M28.1.23 |
| 11 | 高山座 | 高山市 | 1 | M28.12.23 |
| 12 | 達磨座 | 羽島郡笠松町 | 1 | M27.5.5 |
| 13 | 天狗座 | 羽島郡笠松町 | 1 | M26.4.18 |
| 14 | 富本座 | 美濃市上有知 | 1 | M26.12.24 |
| 15 | 豊国座 | 中津川市苗木 | 2 | M28.9.17, 11.22 |
| 16 | 八幡座 | 瑞浪市明世町 | 1 | M29.8.30 |
| 17 | 花菱座 | 岐阜市長良 | 1 | M24.3.3 |
| 18 | 萬梅亭 | 中津川市付知町 | 3 | M27.5.1, 18, M28.3.3 |
| 19 | 湊座・港座 | 羽島郡笠松町 | 3 | M26.12.20, M27.1.6, 2.17 |
| 20 | 南座、北座 | 高山市 | 1 | M22.3.17 |
| 21 | 明治座 | 中津川市加子母 | 1 | M27.2.12 |
| 22 | 森元座 | 中津川市付知町 | 1 | M29.1.8 |
| 23 | 豊盛座 | 下呂市金山町 | 1 | M27.5.1 |
| 24 | 若宮座 | 恵那市中野方町 | 1 | M20.12.14 |

4. 岐阜市の地芝居

岐阜の東濃地方が地芝居の盛んな地であることは、よく知られている。前出の「岐阜の宝もの」でも「東濃地方の地歌舞伎と芝居小屋」のように地域が限定されており、中津川市は「地歌舞伎のまち中津川」を観光のキャッチコピーにしている。芝居は東濃という認識は明治期にも明らかで、新聞記事にもたびたび現れている。引用はいずれも『岐阜日日新聞』からである（旧字は新字に改める。空欄挿入、下線は筆者。振り仮名は適宜削除。以下の引用にても同様）。

【記事1】 ●村芝居流行す 東濃の名物村芝居は 土岐郡の如きも甚しき流行をなし 適

ばれ有為の青年輩も 皆此の熱にうかされて 那処の青年会員某は 縁の下とこの九太夫が上手だつた 否な此処の高等四年生浮太郎は のべ鏡のお軽とこに当りを取つたなぞと言はるゝを此上なき名誉となし居るよし (M24.10.3)

【記事2】●村芝居の稽古 師直は素顔で似合ふ村芝居、土岐郡肥田村浅野区及び泉村大富区にては 若い衆連が例の素人芝居を興行せんとて 稼業は打捨て 三度の食事さへ殆んど打忘れて 高い日当の振付を雇ひ ギツクリ、バツタリ稽古の最中だといふ 蓋し素人芝居は東濃地方の風土病なり 是非に及ばずとは或人の評 (M28.9.20)

上記の記事では、東濃の芝居は「名物」「風土病」と称され、日当を払ってでも振付師に指導を受けている【記事2】。このように、東濃の芝居への情熱は疑いないものであるが、実は明治期には西濃にもその熱が波及していた。新聞記事で確認できたところでは、明治15年(1882)からである。

【記事3】●東濃地方にて年々村演劇しばひの流行することは 人の知る所なるが 今年西濃地方には何処の村も演劇を興行するよし (M15.11.28)

【記事4】●東濃の演劇しばひ 西濃の煙火はなびは人の知る所なるに反して 今年西濃にて演劇流行の事は 度々紙上に掲載せしが 今日とこの景況にては 曾井中島を始めとして至る所 先代萩や二十四孝を興行せざるなく 皆々は狂気の如く奔走する由 又聞く所に因れば 戸長殿や豪農が勸進元や場方となり居らるゝといふは 妙な世の中 (M15.12.5)

上記記事に加えて、表1, 2でも岐阜市や各務原市の地芝居記事がかなりあることが目を引く。もちろん、記事の多寡がそのまま芝居熱の高さを示しているわけではない。社屋が岐阜市にあった岐阜日日新聞社が、情報を集めやすい近隣地域の記事を多く掲載したことは容易に想像できる。また、同一の興行が複数回にわたって記事になっている場合もあり、記事の多寡が興行数と一致するわけでもない。しかし、それを踏まえてなお、東濃に限らず明治期の岐阜は、地芝居に熱かったことを指摘しておきたい。

各務原市では、村国座が現存していることから、地芝居が盛んだったことがうなずかれよう。しかし、表3に各務原市の該当が見られないのは不審である。岐阜市は表1で記事52点を数えるが、中でも伊奈波の18点が目を引く。これは、表3の8.国豊座、10.末広座に該当する。両座については、過去に論考を著したことを「はじめに」で言及したが、その論考では本業の役者による来岐興行を中心にしていた。今回は、両座における素人の芝居を巡る状況を紹介したい。

○ 国豊座

明治22年(1889)10月、国豊座で素人芝居をしようと、若者達が集まった。「数年前に興行したる連中」【記事5】である。

【記事5】●素人芝居 当市末広町 桜町松屋町及び中教院前の若者連数名が共同して

素人芝居（数年前に興行したる連中）を 伊奈波国豊座 に於て興行せんと 昨今頻りに奔走相談最中なりといふ（M22.10.12）

反対意見もあったものの、「伊奈波辺の某数名」【記事6】の尽力もあって実現の方向に事態は好転する。この「某数名」とは地域の有力者であろうか。

【記事6】●素人芝居 ^{かつ} 曾て日外の本誌に掲載したる 当市遊芸好きの若者連十数名が 今度伊奈波国豊座に於て芝居をなさんとするに 再三苦情が起りて中止の姿なりし処 伊奈波辺の某数名の尽力にて事纏まり 愈々興行することに決定し 両三日前より桜町善燈寺に於て稽古に取掛りしが 今其戯題を聞くに 前狂言として伽羅先代萩 大序より大切迄 切狂言としては 伊勢音頭恋の油屋を 上中下演ずると 尚ほ大入は来月上旬なりと聞きぬ（M22.10.26）

実際の大入（初日）は11月22日であった。昼夜稽古し木戸銭を取ったとなると【記事7】、もはや「素人」と言っているのであろうか。

【記事7】●素人芝居 予て本誌に掲載したる当市好劇連の若者十数名が 先頃より昼夜稽古中なる素人芝居は 愈々今二十二日正午十二時より 伊奈波国豊座に於て興行する由にて 戯題は先日掲載したる如く 前狂言は 伽羅先代萩大序より大詰まで 切狂言は 伊勢音頭恋の寝釵上下にて 木戸銭は壹錢五厘の二枚札なりしといふ（M22.11.22）

この素人芝居興行は大成功だったらしく、11月27日には演目が加わり【記事8】、実現の可否不明ながらも、他地域への遠征までささやかれた【記事9】。

【記事8】●戯題差加へ 当市伊奈波国豊座に於て興行中なる岐陽連若者の素人芝居は 昨日より一ノ谷三段目（熊谷陣屋の段）と累土橋の二幕を差加へたり（M22.11.28）

【記事9】●素人芝居 当時当市の伊奈波国豊座に於て興行中なる当市の素人芝居は 昨日を限り打揚たるが ^{それ}夫より名古屋大垣等に行き一興行せんととの計画あるが 名古屋では定めて大当り否……と道路にての評判（M22.11.30）

この興行の経緯を追うと、素人の芝居好きが単なる余興で楽しむという域に留まらず、地域を巻き込み、金銭も絡むかなりの大事になっていることが分かる。

○ 末広座

末広座は、明治19年（1886）11月、火事で焼失した。再築・再興は順調ではなく、26年（1893）4月に、ようやく規模を縮小して再スタートした。小屋が小さくなったためか、再興以降は大物役者の興行よりも、素人芝居が増えている。同年5月、6月の末広座の記事からは、素人芝居に熱中する若者の勢い余った様子が見て取れる。まず5月には、芝居小屋での食べ物屋台の出店を

巡るトラブルがあった。引用が長文に及ぶため、注目点に下線を施した。

【記事10】●小屋元と鰻屋の八分 岐阜市末広町末広座にて 此頃中素人芝居を興行し居れるが 其の開場当日より 町内若者の承諾を経て 加和屋町の或る鮓屋が末広座の前へ屋台を出せしに 其れが為め中店の売高に影響を及ぼしければ 小屋元の古道具半助は去る二日 右屋台店の退去を促したり 乃で末広町の若者連は 忽ちメリーと掃溜の淵に生へた落ほどの青筋を額に現はし 大に小屋元の不当を鳴らして 以後は一同末広座の木戸を潜らぬ事に決し 且つ今度の芝居に忠六の弥五郎だの 太十の重次郎だのといふ役を取つてゐる同町鰻屋吉茂事 生月茂七の長男正吉 今度此のたびの芸名尾上正幸に対し 今日限り舞台へ出るなと掛合つた故 町内若い衆の剣幕には敵し兼ねて 正幸の千両役者が其の日から芝居を断はつたので サア大変 小屋元は 悔り仰天して 実に何うも今度の芝居は此方のお息子様一人で持つてゐます 其れに今更抜けて貰つてといふものは 薩張り芝居が出来ません 正幸さんは何うも感心に芸が巧いから 実に素敵な人気でげす 其の座頭さんに見放された日には 必死溜りません 楽屋中は申すに及ばず 数ならぬ私しまで 如何ばかりか大慶 オット愁嘆至極に存じ上げ奉ります 其の為め口上左様など、出放題におだて上げた処から 鰻屋先生は煙に捲かれ 子を褒められた嬉しさに 町内の若者へはダンマリにて俸れを再出勤させ 鉄砲創には似たれどもとか 二つには又初菊どのとか踊らせて 親の口から鰻屋ア吉茂の姫殺しと申しますぜい 喃漢と遣りも仕兼ねぬ塩梅ゆゑ 若者連は再び激昂し 直ちに生月茂七 町内八分の決議をぞ為したりける 之に依つて 吉茂方は其の後頓と鰻が売れぬので 殆んど閉口して居るに引替え 先頃長良から引越て来た鰻専門の大浜屋は お客を一手に引受けて蛭子顔だといふ 尤も昨今町内の中老達が仲裁に立入り 精々若い衆の気焰を吹消して居るさうだから 何れ仲直りが出来るでせう (M26.5.6)

芝居小屋の前に勝手に屋台を出した若者達のほうが悪いように思うのだが、自分達が許可した屋台を退去させられた若者達は激怒する。その怒り方が、今後末広座の芝居は見ないことにする、末広座で興行中の主役（鰻屋生月茂七の長男正吉、芸名尾上正幸）の出勤を止めるという方向に向かう。主役が出勤しないと困る小屋元が、主役の父親の鰻屋に泣きついてどうにか彼を舞台に戻ってこさせたが、そのことで若者達がさらに怒り、今度はその鰻屋を八分にして鰻購入をボイコットし、商売を立ち行かなくさせるという顛末である。若者達の傍若無人な振る舞いには呆れるが、この記事が興味深いのは、素人芝居と言いつつも、鰻屋の長男が自称ではあろうが芸名を持ち、客を呼べる人気役者として認知されていることである。「千両役者」は言い過ぎだろうが、彼が出ないことに小屋元が「悔り仰天」するような役者ではあったわけである。ただの余興レベルではないことが、この一連の出来事からも分かる。

6月には、小屋の利用を巡っていざこざが起きる。最初美殿町の泉座（明治25年（1892）10月開場）で興行をすることになっていた若者達【記事11】が、使用料が高額になったことなどに不満を持ち、末広座に場所を変える騒ぎになった【記事12】。泉座、末広座とも、当時開場もしくは再開して日の浅い新しい劇場である。

【記事11】●又ぞろ素人芝居 一雨毎に岐阜市には素人芝居が生えると見えたり 今度は

些と見られるだろうとの前人気にて 出勤の役者はんは金津廓¹⁰⁾の若い衆連(妓夫は勿論仲間に入れず) 蓋明けは来月六日頃の積り 場所は美殿町の泉座と定まり目下同廓栄枝町芸妓屋桔梗屋米八方の二階に於て ソラ左の足を出して ナニ着物を捲つて毛脛を出すのぢや無い 其の足を斯う踏出すのぢや(後略)(M26.5.28)

【記事12】 ●金津の若者大ひに憤る 別項金津廓素人芝居の若者は 最初美殿町の泉座に於て興行せんと同座に頼みしに 同座にては 持ても立てぬ高ひ小屋代を云ひ張るのみならず 其外にアレが入用 之れに入費と云ひ立てたので 若者等は大ひに憤り 人を馬鹿にするのも大体があると腕をまくり 遂に末広座で興行したる次第なるが 若者等は 此の分ではすまされない 此れから先き泉座で興行のある度毎に 押出して妨害をなし 一番困らせて呉れると云ひ居る由(M26.6.15)

先にあげた国豊座の素人芝居の記事から4年後のこの頃、雨後の筈のように岐阜市で素人芝居が盛んになったとある【記事11】。金津廓が出現し、町全体がより賑わいを増していたことだろう。料金を釣り上げる泉座はかなり強気だが、泉座でのその後の興行を見ると、素人による興行よりも本業の役者一座によるものが多い。元々地芝居に小屋を貸す気があまりなく、難癖をつけて若者達を追い出したのだろう。一方、規模を縮小して再興した末広座は、地芝居興行が多い。岐阜市の繁華の中心は、明治24年(1891)の濃尾地震後に伊奈波地区から柳ヶ瀬地区に南下するが、本件もその現れのひとつだと考えられる。

国豊座も末広座も現存しないが、明治20年代には元気いっぱい若者達が、いささか問題を起こしながらも両座で芝居に興じていたことを、本節では実例をもって示した。

5. 新聞記事に見られる地芝居への評価

表1, 2に示したように、多くの地芝居関連の新聞記事が『岐阜日日新聞』に見られるが、地芝居への情熱、地芝居に熱中する人々の姿を浮かび上がらせると同時に、それらへの批判も相当数見受けられる。地芝居は風紀を乱すものとして、何度も規制されていたからである。

維新後間もない明治5年(1872)、俳優鑑札制度が開始される。鑑札を持たなければ、本職の歌舞伎役者でも舞台に立つことができなくなった。これが素人役者にも適用された。『中津川市史下巻Ⅱ』(中津川市、2006)によると¹¹⁾、明治7年(1874)に岐阜県令小崎利準は芝居の興行地を県内18箇所限定し、翌年には俳優等に税金を課し、素人の興行でも「遊芸鑑札」が必要と定める。それでも相変わらずの状況だったためか、15年(1882)には学童の演劇について禁止の諭達が出される。こうした背景もあって、地芝居に対して批判的な記事が多く書かれていたのである。実例をいくつか示そう。

【記事13】 ●学齡児童の狂言 東濃の名物と云へば 誰しも素人狂言に指を屈するなるべ

10) 金津廓は、明治21年(1888)11月に現柳ヶ瀬に開かれた遊郭である。

11) pp.1578~1579

し 此の狂言も大半は秋冷の時候と共に熱度が減じたる有様なるか 過日の事とか恵那郡の或る村落にて 素人狂言の催しありたるか 其の過半数は学齡兒童にてありしとは 聞くも忌はしき話なり 欧米文明の新空気を呼吸する今日に方り 尚ほ是等の野蠻者流を見るあらんとは 吁々東濃教育の度合は 定めて如何ぞや……高乎……低乎……我々は此の一斑を以て 其の全豹を評さんと欲す 非邪 (M22.10.16)

【記事14】 ●村芝居、会員に伝染す 東濃地方の愚物どもが 彼の沙汰の限りなる芝居の狂熱に侵さるゝ事は 今更珍らしくも無きが 無教育の蛙切り 豊年を祝ふは唯だ是あるのみと思ひ居る農民輩なら未だしもなれど 土岐郡土岐津町辺にては 学術研究とか智識交換とか 口には立派な事を唱へ居る 然も何々会員と肩書のある青年輩までが 此の村芝居熱に侵さるゝ如き腐敗物あるには 実に嘆息に堪ずとなり (M24.9.8)

【記事15】 ●馬鹿い衆の素人芝居 羽栗郡嶋村の若い衆は 素人芝居を目論見既に廿日程前より ソレとん〜〜 クルツト廻つてカラシ杯と不器用に稽古中なるが 来る十八日は旧暦十月三十日の神迎ひに相当するより 同日花々しく大入をなさんものと 子を甘やかす親達までが大織り押立て一世一代の馬鹿さわぎ 昨今竹ヶ鼻町へ呉服等の買物にゾロ〜出掛けるよし (M25.12.14)

【記事16】 ●馬鹿の極点 東濃恵那郡阿木村の馬鹿い衆 昨今芝居の稽古に夢中なり 斯る下らぬ事に費す金を 水害地方へ義捐せば如何 (M26.9.26)

【記事13】のように児童への悪影響を心配するものが多い。「欧米文明の新空気」に対して、地芝居は「野蠻者流」なのである。にもかかわらず、児童のみならず、高い教育を受けているはずの青年達まで芝居熱に浮かされる【記事14】。芝居に熱中する若い衆を揶揄した「馬鹿い衆」【記事15】という語彙は、この後繰り返し紙面に出現する。彼等には「子を甘やかす親達」がおり、親子揃って馬鹿騒ぎをする。このような騒ぎが繰り返され、挙句に「馬鹿の極点」【記事16】とまで言われている。

【記事16】は水害であるが、自然災害と娯楽とのすり合わせは今も昔も難しい。明治24年(1891)10月28日の濃尾地震では甚大な被害が生じ、その直後はさすがに芝居を自粛していたようであるが、被害を免れた地域では、翌月には芝居をし始める輩がおり、それに対する批判も起きている【記事17,18】。

【記事17】 ●村芝居 時節柄少しは謹んで貰ひたしと云つた処が 同感同情の念なき奴輩の耳には入るまじく 所謂縁なき衆生は度しがたけれど 四千万の我同胞中 否百万の我が県民過半は劇烈なる地震に遭遇し 家財を蕩尽して飢寒を訴へ 父母を喪ふて余燼中に白骨を求め 妻子を傷つけて塵焔中手当の行届かざるを歎ずるものある今日に当り 幸い己れ震災を免れたればとて 馬鹿〜しき田舎芝居に狂奔するとは何事ぞ 聞く郡上郡土京村及び飛騨国益田郡竹原村大字乗政、同郡三郷村大字萩原、同郡下呂村大字小川及び森、同郡中原村大字保井戸及び門和佐に於ては 近々田舎芝居を興行せんとすと 是れ等の奴輩に向つて

幾回無情、浮薄、無感覺、無神経等の語を費すも要なき業なれば 只馬鹿の一語を以つて評し去らん 苟りにも之れを口惜しと思はゞ 暫しなりとも田舎芝居を止めよ (M24.11.12)

【記事18】●馬鹿者 郡上郡大原村福野組の馬鹿者 否若者は 県民の不幸を余所に見て村芝居を為し 去る十日大入三日間興行したるは 余りの仕方に就き 存分筆誅をとの投書ありたり (M24.12.16)

次の【記事19】は、「慈善演劇」という名目で辻褃を合わせた例である。若者達が密に準備をし警察署からの許可も得た芝居をいざ上演しようという時に、地震後という時節柄不謹慎・不都合だと町内から大反発が起こる。両者自説を譲らなかったが、芝居の収入の十分の一を義捐金にするという仲裁で話がまとまったという。

【記事19】●慈善演劇の顛末 本月十六日大入の筈にて多治見町榎元座に於て 例の東濃名物素人寄合芝居を興行せんと 隣村の土臭い若い衆が集合し 密に四五日間稽古し イザ明日より大入と云ふ十五日 相当の手續を以て警察署に出願せしに 同署にては 時節柄余り世間の聞へも悪しとて注意を加へられしも 種々言^{ことば}を構へて 終には許可を得 町内へ其広告をなせしより 町民の激昂する処となり 不都合なり 隣村の馬鹿者めらが 屢々新聞屋に筆誅せられしにも懲りず 時も有るふに震災後日の浅き今日 素人芝居とは何事ぞ吾々が其筋に向て震災救助願 商業資金貸下願等に大に差支を来すのみならず 多治見町に於て此際右様の狂気^{きちがひ}じみたることをなさしめては 多治見町の不面目なり 飽まで之を中止せざるべからずと 終に委員を選んで町役場 警察署等に出頭し 出願せし始末を取調べし 上 願人を役場に召還して説諭を願ふことにし 又一方よりは談判委員を芝居連に差向け談判に及びしに 少しも聴入れず 許可を受けた故飽くまで断行するとの意気込に 中止連は益々憤激し 町総代よりは 今回の芝居に一人も見物に行くべからず 若し行くものは料料金五拾銭を取ると云ふ嚴重なる触を廻したるより 断行論者も大に狼狽したるが 遂に同地の青年会員安藤清六氏が 慈善芝居として興行し 日々収入金の十分の一丈地方の震災被害者へ義捐することに中裁を試みしに 断行連は賛成し 義捐金は日々町役場に納むることまで承諾せしも 中止派 尚承諾するの模様もなかりしが 此頃終に不本意ながらも承諾したるより 近日中に見出の如き慈善演劇を興行する由 (M24.12.23)

これほどまでに批判され罵倒されながらも、なぜ岐阜の地芝居文化は継続したのか。実は、地芝居愛好家は、若者達だけではなかった。村長【記事20】や議員【記事21】にも芝居好きがいた。

【記事20】●驚きいつた村長 可児郡或村の村長某は 震災後部下人民困窮し村内到る処に歎声を聞かざるは無く 或は租税免除を請願し 或は小作人一同地主に逼り 彼と云ひ是と云ひ 実に村内多事の折柄なるに 役場へは更に出頭せず 毎日自宅にありて退屈の余りにや あらふ事かあるまひ事か 人民の歎声を耳にも掛けず 同村の俳優某を勧め 無頼の青年輩を呼び集め 役場員の諫止するも聞き入れず 自分の宅地内なる舞台に於て芝居興行を為さしめんと 目下頻りに其の下稽古を励まし居ると云ふが 此の時節柄をも弁へず 村

長たる身分にて斯る事を為して楽み居るとは 僣^まてへ驚き入つたことにこそ (M25.7.1)

【記事21】●俳優議員（村民辞職を勧告す） 可児郡上之郷村辺に村会議員兼学務委員を勤むる何野某氏は 過日來村内の馬鹿者を煽動し 素人芝居興行に専心奔走しつゝ、ありしが幸ひにして之に応ずるものありしかば 大に力を得て一層身を入れ 五六日前より其下稽古に着手し 自分は先づ座頭たらん事を希望し居ると云ふ 斯く迄芝居興行の順序が運びし事として 何野氏は喜びは手の舞ひ足の踊るを知らざるほどにしあれば 自分の負ひ居る職務は殆んど尽さざる如く 謂はゞ冷淡極るとも云ふべければ 同村民の重なる者は 此頃中大に激昂し 斯の如き吏員あるに於ては一村の不利益も亦甚だしからんとの説を唱へ 不日辞職勧告を為す事に協議したりと云ふ話なり (M26.8.16)

本業を疎かにするほどの熱中ぶりは迷惑だが（恐らくは面白おかしく強調されているのであろうが）、「若い衆」や「農民輩」だけではなく、村長や議員にも芝居好きは珍しくなかったのではないだろうか。さらに言えば、批判している記者自身も、本心は別だったのかもしれない。建前では地芝居はけしからんと言いつつ、本音では老いも若きも、職業も隔てなく、芝居に心浮き立たせていたのが明治の岐阜の人々ではなかろうか。そうでなければ、たとえ批判ではあっても、これほどまでに紙面に繰り返し地芝居の記事が現れることもなかろうと思うのである。

おわりに

本稿では、明治20年代までの『岐阜日日新聞』紙上の地芝居関連記事344点を用い、岐阜の地芝居が盛んであることや地芝居の実例、地芝居とそれに熱中する人々への視線について考察した。岐阜は芝居が盛んだという一般的な印象を、具体的に補強できたと自負している。もちろん新聞は万能な資料ではない。新聞社から離れた地における情報がどの程度掲載されたのかという発信側の制限、明治20年代の東濃や飛騨でどれほどの人が新聞を見ていたのかという受信側の事情、それらに留意する必要がある。しかし、新聞はその当時を確実に移す鏡であることも確かである。他の資料、例えば市町村史と見比べながら、慎重にかつ有効にこれらを活用していく所存である。

今後考えられる課題には、舞台上で演じた人々、演じられた演目、興行にたどり着くまでのシステムといったソフト面、芝居小屋・舞台などのハード面があるだろう。例えば、ソフト面の演者について言えば、芸名もある人気役者がおり¹²⁾、好評を博して他の地域への遠征を噂される興行もあった¹³⁾。木戸銭を取っていることもあり、現代の我々が考える「素人」という概念とは、微妙にずれるのではないかという感触を得ている。さらに感触程度のことを続ければ、ざっと見た限りでは、地芝居の演目はいわゆる定番の演目が多い。せつかく1年に1回もしくは数回だけしか演じられないなら、誰もが知っている格好のいい役をやりたいというのは、今も昔も変わらない人の常である。それに、同じ演目だと道具や衣裳も同じものが使えて都合がいいだろう。これは、現在の地芝居の現場でも同様である。また、解明が難しいとは思いますが、地芝居興行のシス

12) 【記事10】参照

13) 【記事9】参照

テムも興味深い。芝居好きが集まって仲間内で演じるだけなら簡単だが、鑑札を取る、芝居小屋を借りる、警察署の許可を得る、木戸銭を徴収する等のシステムは、地芝居が行われる各地でどう滞りなく行われていたのだろうか。各芝居小屋に残る資料にヒントがあるかもしれない。他地域の地芝居についての先行研究を探索する必要もある。

最後に、視点を変えての私見を述べたい。岐阜で学ぶ留学生に教育を施す立場でもある筆者は、研究対象として地芝居を見るだけでなく、教育の素材としても魅力的だと考えている。地芝居は、岐阜に来たからこそ体験できる文化のひとつであり、地域文化を学ぶ格好の素材である。また「はじめに」で述べたように、岐阜県は地歌舞伎（地芝居）を外国人誘客、いわゆるインバウンド観光につなげようとしている。この試みはまだ始まって約3年であり、可能性と不安定要素を併せ持っているが、留学生が地芝居を経験して感じたことをフィードバックすれば、外国人に地芝居を楽しんでもらうためのヒントともなる。研究と教育と地域貢献の3面の魅力を持ち、3面を掛け合わせることができるのが岐阜の地芝居である

明治初期には、児童に悪影響を与える悪習であり廃止すべきであると評された地芝居が、平成の現在、地域文化の伝承として小学生や中学生の参加が奨励され、外国人にも愛でられるものになるとは、明治の素人役者達が知ったら大いに驚き喜ぶことであろう。そのようなことを想像しながら、今後も彼等の姿と岐阜の地芝居を引き続き掘り起こしていきたい。

参考文献

- 小栗克介編、近藤誠宏写真『美濃の地歌舞伎』岐阜新聞社 1999
小栗幸江企画・編、近藤誠宏撮影『ぎふ地歌舞伎衣裳』岐阜新聞社 2015
土谷桃子「岐阜の伊奈波の芝居小屋—末広座と国豊座—」『岐阜大学留学生センター紀要2014』、2015.7
同「岐阜の伊奈波の芝居小屋(2)—末広座と国豊座 濃尾地震後の再築・再興—」『岐阜大学留学生センター紀要2015』、2016.7
同『岐阜地域芝居興行記録一覧稿（明治初年～）』JSPS 科研費25370213助成調査成果、2016.3
松井今朝子「美濃・飛騨 歌舞伎遊山 日本一、芝居に熱い！」『ひととき』2016年9月号
守屋毅『村芝居 近世文化史の裾野から』平凡社 1988
安田文吉・安田徳子『ひだ・みの地芝居の魅力』岐阜新聞社 2009

『大人の学び旅2 地歌舞伎を見に行こう』産業編集センター 2017
『岐阜県の地芝居ガイドブック』岐阜女子大学地域文化研究所 2009
岐阜女子大学地域文化研究所サイト <http://www.gijodai.jp/chibunken/chishibai> (20180403確認)

- 『糸貫町史』糸貫町 1982
『恵那市史 通史編 第3巻(1)下 近現代』恵那市1993
『大垣市史』大垣市役所 1930
『各務原市史 考古・民俗編 民俗』各務原市 1985
『可児市史 第3巻 通史編 近・現代』可児市 2010

- 『申原村誌』 申原村役場 1968
『坂祝町史 通史編』 坂祝町 2005
『新修東白川村誌 通史編』 岐阜県加茂郡東白川村 1982
『中津川市史 下巻Ⅱ』 中津川市 2006
『飛騨下呂 通史 民俗』 下呂町 1990
『瑞浪市の歴史』 瑞浪市 1971
『瑞浪市史 歴史編』 瑞浪市 1974
『御嵩町史 通史編 上』 御嵩町 1992

中級日本語学習者を対象とした口頭表現授業

—「口頭表現C」授業報告—

A Class Report of “Oral Expression C” for Intermediate Japanese Learners

田 辺 淳 子

要旨：

本稿は、岐阜大学留学生センター日本語研修コースにおける中級学習者を対象とした口頭表現授業「口頭表現C」について報告するものである。2014年前期から2017年後期までの計8学期間に実施した授業について、計画・授業内容を中心に報告し、今後に向けての課題をまとめる。

1. はじめに

岐阜大学留学生センター日本語研修コースには、集中的に日本語を学ぶ「集中コース」と、専門の研究で忙しい大学院生や研究生のための「一般コース」があり、レベル別に、初級、初中級、中級、中上級に分けられている。本稿の「口頭表現C」は中級レベルの集中コースに在籍する学生が受講できるクラスである。受講生は、プレACEMENTテストの結果、中級レベルと判定された大学院生、研究生、交換留学生、日研生（日本語・日本文化研修留学生）等だが、来日直後の学生から来日後数年経っている学生までさまざまである。また、本学のプレACEMENTテストでは口頭能力試験が含まれないため、学生の口頭能力には大きな差があるという特徴がある。

2. 授業担当前の構想

2.1 授業目標

2014年に初めて口頭表現Cを担当することになった。そのため、2013年までの本学の集中コースの中級レベル（以下、集中C）の受講生情報や集中Cの他の授業内容等から、口頭表現Cの目標や授業計画を考え、田辺（2014）で「研究生・大学院生主体の中級口頭表現クラスを考える—先行研究および本学における事例から—」としてまとめた。その中で、本学の口頭表現Cを受講する学生に求められる口頭表現能力を、「研究活動・研究生活を支える日常日本語会話力」とし、そのために以下の習得目標を設定した。

- ① 聞き取りやすい発音
- ② 日本語でのコミュニケーションへの慣れ
- ③ 待遇を含む、場面・状況・相手を考えた談話構成・談話展開
- ④ 語用論的能力
- ⑤ 定型表現・慣用表現・オノマトペ
- ⑥ 研究活動で必要とされる文法・表現・機能

これらの目標は、受講生が大学院生や研究生ではなく、交換留学生の場合でも有効であり、取得目標の⑥は「研究活動」を「授業」や「日本での学生生活」と置き換えることが可能である。タスクの会話の状況やスピーチのトピックに関しては、交換留学生用の状況やトピックを別に設定することで対応できる。

2.2 授業内容と流れ

目標に合わせ、授業はシャドーイング、スピーチまたは発表、インプット（明示的導入・練習）、タスクの4つの活動で構成することにし、表1のとおり計画した。それぞれの活動が上述の習得目標の①～⑥と関係があり、授業での導入と練習・実践を4つの活動の中で何度もスパイラルに経験できるように配慮した。例えば、シャドーイング教材には助詞の省略が多く含まれているが、言語機能のインプットで明示的に学習する。その後、シャドーイングで練習し、スピーチでは助詞を省略せず、会話では省略できる場合は省略してもいいことをスパイラルに経験し習得を図る。

表1 授業シラバス

| 回 | シャドー イング | スピーチ・発表 | インプット | タスク |
|----|---|--|----------|--------------------------------|
| 1 | 導入 | オリエンテーション：クラスの目的・目標、授業の進め方、スケジュール、評価方法 ニーズ調査アンケート、コメントシートの記入の仕方 自己紹介（クラスメンバーに合わせた場面・状況を設定して） | | |
| 2 | 1 | 自己紹介1 | 話の切り出し | 電話をかける（不在連絡票） |
| 3 | 2 | 自己紹介2 | 待遇 | 理由・許可・依頼 |
| 4 | 3 | 新しい語1 | 助詞の省略 | アドバイスを仰ぐ |
| 5 | 4 | 新しい語2 | 相槌 | 苦情・不満を述べる |
| 6 | 5 | 研究室・アルバイトの ルール1 | 聞き返し | 名前のわからないものを描写・説明 する |
| 7 | 6 | 研究室・アルバイトの ルール2 | 接続詞・接続表現 | わからないことを確認しながら聞 く・質問する・まとめる |
| 8 | 中間試験（シャドーイング、面接者との会話、ロールプレイで1人10～15分程度） | | | |
| 9 | 7 | 発表なし（中間試験の フィードバック） | 縮約形 | 電話に出て伝言を受ける |
| 10 | 8 | はまっている物・こと | 終助詞 | 違いを説明する・比較する |
| 11 | 9 | 私の国と日本の違い1 | 注釈挿入 | 手順・過程を説明する |
| 12 | 10 | 私の国と日本の違い2 | オノマトペ | ストーリー・テリング |
| 13 | 11 | オノマトペ1 | フィラー | ディスカッション① |
| 14 | 12 | オノマトペ2 | 慣用句 | ディスカッション② |
| 15 | 期末試験（シャドーイング、面接者との対話、ロールプレイで1人10～15分程度） | | | |

田辺（2014）による図表を一部修正

教材は、シャドーイングのみ市販書籍の『シャドーイング 日本語で話そう 初～中級編』を使用し、他の3つは講師作成のハンドアウトを使用することにした。

1回90分の授業で4つの活動全てに充分時間をかけることは難しいと想定された上、授業外での自主学习や積極的な日本語使用で練習・実践を行うことが重要であると考え、以下の図1の流れをデザインした。

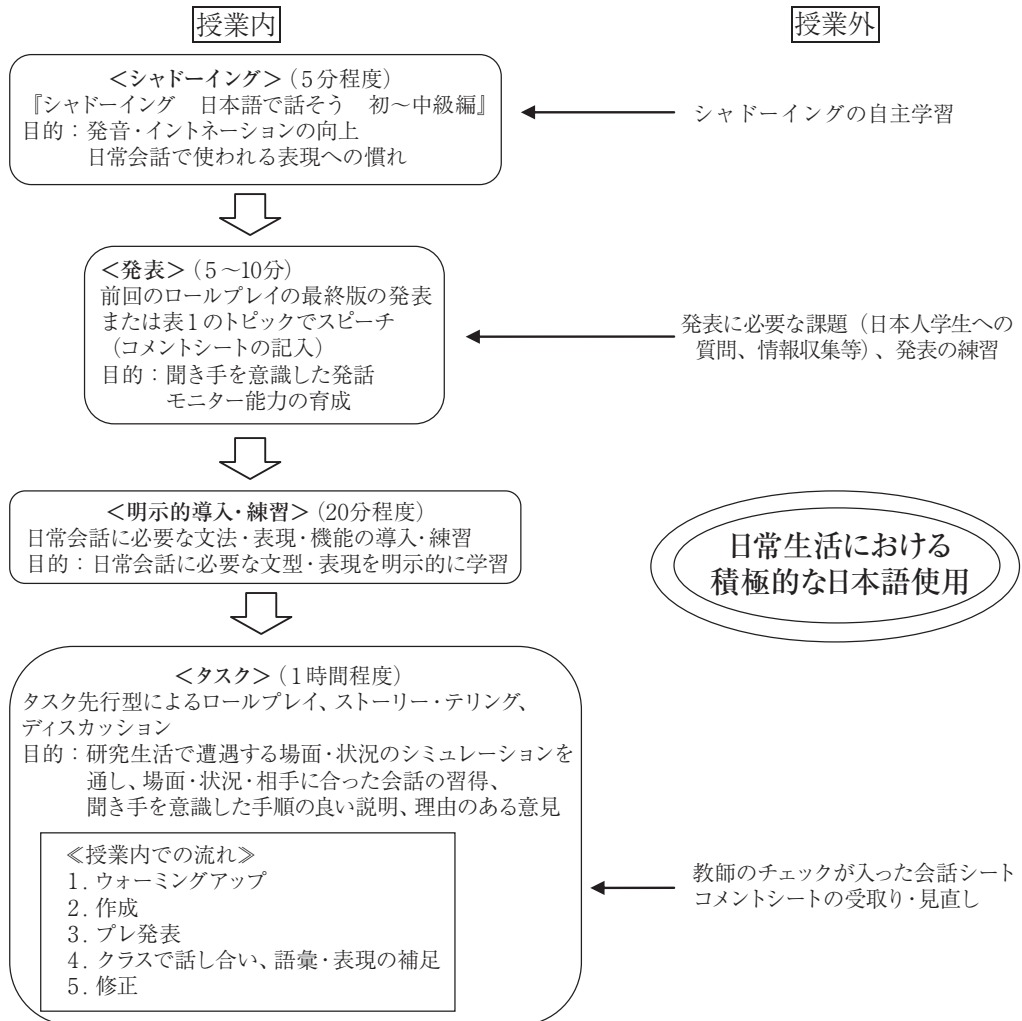


図1 授業内外の流れ（田辺，2014，p.25を一部修正）

まず、授業の始めに口慣らしも兼ねてシャドーイングを実施する。その後、前回授業のタスクの会話発表、またはスピーチが続く。スピーチのトピックはシャドーイングの中で取り上げられている内容なので、シャドーイングの時間内にスピーチの原稿書きに向けたブレインストーミングも同時に行う。会話とスピーチの発表に関しては、発表者、オーディエンス共にコメントシートを記入し、良かったところ、改善すべきところを明確にする。講師はコメントシートをチェッ

くし、文法や語彙の違いを訂正して記入者に翌週返す。発表者には講師を含むオーディエンスのコメントをまとめたものを渡す。次に、日常会話に必要な文法・表現・機能のインプットに進む。導入だけにせず、練習問題をすることで習得を目指す。最後にタスクを行う。多くは「アドバイスを仰ぐ」「苦情・不平を述べる」等の機能・場面別ロールプレイで、ウォーミングアップでブレインストーミングをした後、会話の流れや表現を確認した後、同じ機能・場面のさまざまな状況から、自分の生活でもっとも重要だと思われる状況、または、もっとも遭遇する可能性が高い状況を学生が各自選び会話を考える。会話の SCRIPT を書く際、シャドーイングやインプットで習った語彙・文法・表現や機能を積極的に使う。シャドーイングや発表の練習、会話の SCRIPT 書きは宿題とする。

3. 授業の実践報告

3.1 クラス状況

2014年前期から2017年後期の受講生は表2の通りで、受講生数は2～12名とばらつきがあった。受講生の属性を見ると、構想を考えた時点と異なり、大学院生と研究生が必ずしもクラスの主体ではなかった。受講生の日本語レベルに関しても、構想時より低いことが多かった¹⁾。中には、日本語でのやり取りがほとんど成立しない学生や、発音の問題で聞き手が発話をほとんど理解できない学生もいた。8学期の間に授業実施回数の変更があり、2016年から1学期全14回となった²⁾。

表2 2014年前期～2017年後期の受講生内訳

| 学期 | 受講生合計 | 大学院生 | 研究生 | 交換留学生 | 日研生 |
|---------|-------|------|-----|-------|-----|
| 2014年前期 | 6 | 1 | 2 | 3 | 0 |
| 2014年後期 | 9 | 0 | 4 | 1 | 4 |
| 2015年前期 | 5 | 2 | 0 | 3 | 0 |
| 2015年後期 | 12 | 0 | 9 | 2 | 1 |
| 2016年前期 | 7 | 2 | 1 | 4 | 0 |
| 2016年後期 | 2 | 0 | 0 | 1 | 1 |
| 2017年前期 | 4 | 0 | 2 | 2 | 0 |
| 2017年後期 | 6 | 0 | 6 | 0 | 0 |

3.2 変更・改善した点

上述のようなクラス状況の中、構想のまま授業を実施するのは困難であった。2014年前期と後期は構想に近い形で授業を実施し、その後、2014年度の反省点や受講生のレベル・人数等に合わせ、毎回変更・改善を行った。2014年度の授業内容を振り返った後、どのような問題・課題に対し、どのように対応し変更・改善したか述べる。2017年後期は、全員が研究生であり、2017年前期の学生からの提案を踏まえ大きく変更したため、別の項で説明する。

3.2.1 2014年度の授業の振り返り

2014年前期・後期と構想に近い形で授業を実施したが、構想と大きく異なった点は時間配分であった。シャドーイングは5分程度としていたが、語彙・表現・文法の説明に時間がかかり、毎回20～30分程度要した。発表に関しては、1つのトピックを数回の授業に分けて発表したが、コメントシートの記入に時間がかかり、やはり15～20分程度要した。このため、コース途中でスケジュールを見直し、シャドーイングを除く3つの活動の内容からそれぞれ1～3つ減らした。発表は、タスクの会話の発表を中心にし、予定していたスピーチの「研究室やアルバイトのルール」「はまっている事・物」「私の国と日本の違い」については扱わなかった。インプットでは婉曲表現、タスクではディスカッションを扱わなかった。

学期末に授業に関するアンケートを実施した。口頭表現Cで日常日本語会話を学ぶことに対して、全員が「大変良かった」または「良かった」と評価していた。上述の扱わなかった内容に関しては、「やりたかった」と「やりたくなかった」に意見が分かれた。シャドーイングについては全員肯定的な意見を書いていたが、授業外の練習は、指示した毎日10分程度ではなく、週に1回10～30分程度と答えた学生が多かった。毎日練習していた学生は、発音や発話力だけでなく、語彙・表現力、聴解力も伸びたので、毎日練習する仕組みを考えなければならないと思った。発表のコメントシートについては、「毎回書いたほうがいい」「時々書いたほうがいい」「やめたほうがいい」で意見が分かれた。全員コメントシートを読んだと答えていたが、次の発表に反映させたかどうかとも意見が割れた。実際のコメントシートを見ると、「面白い」「良かった」「声が大きかった」等、簡単なコメントが多く見られ、具体的なコメントや建設的なコメントを書く学生は限られていた。一部選択式のコメントシートを使用すると、時間は短縮できたが、選ぶだけになることが多かった。コメントシートの書き方の指導やフォーマットに工夫が必要だとわかった。インプットでは、終助詞、助詞の省略、相槌・聞き返し、話の切り出し、オノマトペ、待遇について「役に立った」という意見が多かった。終助詞、助詞の省略はルールを十分理解せずに使っていたものが明確になり、相槌、話の切り出し、オノマトペ、待遇はバリエーションが増えたと思われる。タスクに関しては、機能・場面別ロールプレイではさまざまな状況を用意したが、学生の所属や日本語能力によって「役に立った」と評価したものが分かれた。例えば、「違いを説明する・比較する」「手順を説明する」を研究生や大学院生は「役に立った」と評価する学生が多かったが、交換留学生や日研究生は「役に立たなかった」と評価する学生が多かった。コース開始時に日本語での発話に比較的慣れていていた学生の中には「アドバイスを仰ぐ」を「役に立たなかった」と評価する学生がいた。また、日本での生活に慣れている学生は、郵便や宅配便の不在連絡票の連絡は電話でボタン操作のみで済む方法をとるので、電話での会話は必要ないと言っていた。そのため、不在連絡票の連絡で電話をかける会話は、歯科を予約する会話に変更した。全体としては、特に評価の高いもの、評価の低いものは見られなかった。ストーリー・テリングのみ「役に立った」「授業で扱わなくても良かった」のどちらにも選ばれていなかった。その時の受講生のレベル・属性・ニーズに合わせて授業で扱う機能・場面を選ぶのが良いと思われた。

3.2.2 2014年の振り返りを基にした変更・改善

シャドーイングを毎日自宅で練習する仕組みとして、翌週の授業でシャドーイングの試験を実施することにした。試験が必ずしもモチベーションを上げるものとは言えないかもしれないが、

自宅での練習量は確実に増えた。試験の実施方法としては、前の週に扱った範囲を、本を見ずにシャドーイングし、流暢にできるか、授業で解説した語彙・表現・文法を説明できるか、個別にチェックすることにした。これにより授業内のシャドーイングの時間がさらに長くなったが、シャドーイングに対する評価は、授業内でシャドーイングを扱う時間（長さ）を含め、全学期を通じて高かった。

発表は、スピーチの回数を減らし、タスクのロールプレイの会話の発表を中心とした。コメントシートは、初回の授業で評価すべきポイントと書き方を詳しく説明することにした。2015年前期にコメントシートの書き方に関する配布資料も作成し指導したが、配布資料があると、配布資料に沿ったコメントが増え、学生独自の視点のコメントや自由なコメントが減ったので、2015年後期以降はパワーポイントを使った説明に限定した。コメントシートのフォーマットは、良かった点と改善点の2点について自由に書くものと、表3で示した評価項目を挙げ数値化できるようにし、コメント欄もつけたものの2種類を準備した。評価項目は発表内容によって多少変えた。例えば、表3は会話の発表用のコメントシートだが、スピーチの場合は、評価項目に「聞き手とのアイコンタクト」「聞き手の理解度に合わせた説明」等の評価項目を入れた。以上により、コメントの内容がより具体的で建設的になった。コメントシートを回収し、誰が書いたかわからない状態でまとめたものを発表者に翌週渡すことは引き続き実施したが、コメントの質が上がったことで、コメントシートの内容を次の発表に反映させる学生が増えた。口頭でコメントすることも実施してみたが、対面だと厳しいコメントを言いにくいようで、活気に欠けた。指導により改善されると予測されたが、形に残った方が次の発表に活かしやすい考え、コメントシートを使う形で続けた。

インプットとタスクは、コース開始前にスケジュールを立てる際に、過去のデータから評価の高かったもの、授業をする上で必要なものを優先的に選んで取り入れるようにしたが、コース開始後1か月後ほどで学生の属性・ニーズ・レベル等に合わせ、学生と話し合った上で選びなおすようにした。インプットは時間短縮のため、配布資料を書き込む必要の少ないものに作りなおした。タスクは、口頭表現Cの目標「研究活動・研学生活を支える日常日本語会話力」の「日常日本語会話力」に焦点を置き、ディスカッションとストーリー・テリングは扱わないことにした。

以上の変更・改善により、4つの活動を効果的に行うことができるようになった。日によっては4つの活動を全て行うのではなく、インプットがない日や発表がない日もあったが、授業が単調になるのを防ぎ、学生の理解度やニーズに合わせることができたと思っている。日常日本語会話の習得具合は学生によって差があったが、初級レベルを超えた日常日本語会話力が全員身に付いたと言える。

表3 コメントシート

| | | |
|--|-----|------------|
| 日付 | 発表者 | |
| 発表内容 | | |
| <評価>評価基準 (5:とてもいい、4:いい、3:ふつう、2:あまりよくない、1:よくない) | | |
| 評価項目 | 評価 | コメント (あれば) |
| 声の大きさ | | |
| 発音・イントネーション | | |
| 区切り | | |
| 会話の流れ | | |
| 会話の長さ | | |
| 待遇・相手への配慮 | | |
| 状況・場面に合った会話 | | |
| 普通体と丁寧体の使い分け | | |
| 文法・語彙表現の正しさ | | |
| 自然な会話のための工夫 | | |
| 原稿の暗記 | | |
| 態度・姿勢・ジェスチャー | | |
| 今回の発表で特に良かったところ | | |
| 改善提案・その他コメント | | |

3.2.3 2017年後期の試み

2014年前期から2017年前期まで構想を基に変更・改善を繰り返しながら授業を実施した。2017年前期の振り返りで学生から、「タスクのロールプレイ会話は他の授業³⁾と少し似ている。その授業では日本人と会話を作るから難しくないが、このクラスは自分で会話を作るから大変だ。」という声が聞かれた。指導方法や扱っている機能・場面が違う上、口頭表現Cでは既習事項を使って自分で会話を作る形をとっているが、ロールプレイと会話作成という点から「似ている」という評価につながったと思われる。どのように差別化していくか考えていたところ、2017年後期は6名全員中国人の研究生で、内5名は英語ではなく日本語で研究をし、日本語で修士論文を書く必要がある学生であった。また、2名は日本語能力試験N1に合格しており、日本語での発話に慣れており、日常会話に大きな問題はなかった。そこで、学生と授業内容について相談し、2017年後期は、機能・場面別のロールプレイをやめ、スピーチと発表中心に大きく変更した。インプットも学生と相談し、学習したいものを8つに絞って扱った。また、シャドーイングは、コース前半は従来の『シャドーイング 日本語を話そう 初～中級編』を、後半は『シャドーイング 日

本語を話そう 中～上級編』を使用した。スピーチの内容は、「自己紹介」「私と日本語」「今までで最も〇〇だった経験」の3つ、タスク型として、「料理の作り方を説明する」、『日本で学ぶ留学生のための中級日本語教科書 出会い』のタスクを基に、写真を使って説明する「街で見つけた面白いもの」、日本人学生にインタビューした結果を説明する「キャリアプラン」の3つを行った。

発表とタスクがもっとも大きい変更点だが、大学院での研究に向け人前で発表する練習になったといえる。回を重ねるにつれ、原稿をただ読み上げることが減り、漢語の発音や区切りにも注意が向くようになった。オーディエンスに伝わりにくいと思われる語彙・表現は言い換えたり、ホワイトボードを使って説明したりする工夫も見られるようになった。

一方で、今まで力を入れてきた「日常日本語会話力」の習得が進まなかった。ある時、学生が休憩時間に電話で「もしもし、私はアルバイトをしたいです。」と話し始めていたのを耳にした。この場合、自分の要求から会話を始めると唐突な感じがするので、「あのう、アルバイトを募集しているって聞いたんですけど」や「アルバイトを探してるんですが」等、自然な状況説明か、「お忙しいところすみません」のような挨拶から会話を始めるのが望ましいと考える。日常日本語会話力はシャドーイングとインプットだけでは十分身に付けることが難しく、やはり授業での会話練習が必要だと感じた。

4. 課題

シャドーイング、発表、インプット、タスクの4つの活動を通じて日常日本語会話力の習得を目指し、8学期間授業を行ってきた。日々の授業や試験から客観的に上達が見られ、アンケートからは学生自身も上達を感じ取ったことがわかった。一方で、いくつかの課題が見つかった。

まず、発音が挙げられる。多くの学生はシャドーイングを通して発音の上達が見られたが、コース開始時に聞き手が理解するのが難しいほどの発音の場合、シャドーイングのみでは十分な改善が見られなかった。シャドーイングで練習した部分は聞き取り可能な発音で発声できても、自由に話す際には元の聞き取りにくい発音に戻ってしまうということが見られた。シャドーイングを使って自宅でどのように練習したらいいか、授業後、個別に少し指導したが、それだけでは十分な成果が上がらなかった。発音にあまり問題がない学生が大半の中で、発音に問題を抱える学生がいる場合、どのように指導していくか、考える必要がある。

次に、中級レベルの日常会話力とは何かを具体的に伝えることの必要性が挙げられる。タスクの機能・場面別の会話でスクリプトを作成する際に、場面に合わない乱暴な表現を使う学生が今までに数名いた。理由は、自分が知っている「教科書とは違う表現」を披露したかった、面白いと思った等さまざまであったが、目標を明確に示し、その目標に向かって今行っている練習がどう役に立つのか、教える側は学生にコース開始時のみだけでなく、常に伝える努力をしなければならぬと反省した。ある程度日常会話ができている学生に対しても同様である。より高度な専門性の高い内容を学ぶことばかりに興味向き、日常日本語に注意が払われないことがたびたびあったが、充実した研究生生活や活動（交換留学生の場合は、充実した留学生生活や授業）のためには、現在何ができていて、何が不足しているのか、何をどう学習していけばいいか明確に示し、日常日本語会話力の重要性を伝える必要がある。

最後に、他のレベルの口頭表現クラスや他の中級レベルのクラスとの連携である。本学の留学

生には、日本語研修コースで1学期のみ日本語を学習する学生もいるが、多くは複数学期在籍する。各レベルの口頭表現クラスが効果的に連携することで、さまざまな口頭能力が身に付けられる。中級レベルの他のクラスとの連携も同様である。例えば、文章表現のクラスで「である体」で書いた原稿を基に口頭表現でスピーチとして発表することで、スピーチの原稿書きのためのブレインストーミング等の時間が省けるだけでなく、書き言葉と話し言葉の違いを意識することができるはずである。

5. おわりに

日本語教育における口頭表現クラスでは、初級では既習文型を使った日常会話が重視される。初級から初中級、中級、中上級、上級へと進むにしたがい、発話量は簡単なやり取りからまとまった量の発話へ、話題はごく身近なことから専門性の高いことへと広がりを見せる。その中で、日常日本語会話が授業で扱われなくなる傾向にあるが、日本での生活や研究を円滑なものにするためには、日常日本語会話力は欠かせない。口頭表現Cを8学期間担当したが、中級レベルの日常日本語会話を授業でどう扱うか、4章で挙げた課題を中心に修正・改善の余地がまだ大いにある。さらに、上級レベルの日常日本語会話についても今後考えていきたい。

注

- 1) 口頭能力のみ低かったわけではなく、中級レベルに在籍する学生の日本語力が全体的に低下した。そのため、集中Cで扱う主教材は『中級を学ぼう—日本語の文型と表現82 中級中期』から『中級を学ぼう—日本語の文型と表現56 中級前期』に変更になった。
- 2) 岐阜大学留学生センター日本語研修コースでは、2014年時点では授業回数は前期が15回、後期が14回であったが、2016年から前期・後期共に14回になった。
- 3) 初中級レベルと中級レベルの学生が日本人学生と一緒に授業をする「口頭表現演習 BC」を指す。

参考文献

- 斎藤仁志・吉本恵子・深澤道子・小野田和子・酒井理恵子 (2006) 『シャドーイング 日本語を話そう 初～中級編』くろしお出版
- 斎藤仁志・深澤道子・酒井理恵子・中村雅子・吉本恵子 (2010) 『シャドーイング 日本語を話そう 中～上級編』くろしお出版
- 田辺淳子 (2014) 「研究生・大学院生主体の中級口頭表現クラスを考える—先行研究および本学における事例から—」『岐阜大学留学生センター紀要2013』pp.17-28
- 東京外国語大学留学生日本語教育センター (2015) 『日本で学ぶ留学生のための中級日本語教科書 出会い』ひつじ書房
- 平井悦子・三輪さち子 (2007) 『中級を学ぼう—日本語の文型と表現56 中級前期』スリーエーネットワーク
- 平井悦子・三輪さち子 (2009) 『中級を学ぼう—日本語の文型と表現82 中級中期』スリーエーネットワーク

中級日本語学習者を対象とした作文授業

—「文章表現C」授業報告—

A Class Report of “Composition C” for Intermediate Japanese Learners

秋 山 容 子

要旨：

本稿は、岐阜大学留学生センター日本語研修コースにおける中級学習者を対象とした作文授業「文章表現C」についての報告である。2017年前期・後期に行った授業について、内容や指導方法を報告し、作文授業のあり方を考える。

1. はじめに

岐阜大学留学生センター日本語コースには、集中的に日本語が学習できる「集中コース」と専門の研究をしながら日本語が学べる「一般コース」の2コースがあるが、「文章表現C」は、集中コースの受講者のみが受講できる。「文章表現C」は中級レベルの受講者を対象としたクラスである。

2017年度前期に初めて「文章表現C」を担当することになったが、岐阜大学で教鞭を取って間もないこともあり、クラスのレベル、受講者の能力、コースの目的、授業の進め方等、把握できていないことが多かった。そのため、Cクラス全体を把握する必要がある。前担当者の授業記録は「文章表現C」だけでなくその他のCクラスの授業記録も読むなどしてCクラス全体を把握することから始めた。コースの最終目標を「論理的に説明文・意見文が書けるようになること」として授業計画を立てた。

2017年度前期・後期に行った「文章表現C」の授業について授業内容、工夫した点、問題点などを報告し、中級レベルの作文授業とはどのようなものであるかを考えたい。

2. 授業計画

2.1 使用教材の選定

前担当者の授業記録を基に、『小論文への12のステップ』（スリーエーネットワーク）、『大学・大学院 留学生の日本語②作文編』（アルク）、『大学・大学院 留学生の日本語④論文作成編』（アルク）、『作文授業の作り方』（アルク）を参考として、ハンドアウトと練習問題を作成して授業を進めることにした。その他に、「ドラマの内容を説明する」という説明文の練習では、YouTubeから映像を取り入れ、授業で使用した。2017年度前期・後期ともに使用教材は同じものを使用した。後期は、ハンドアウトと練習問題を適宜直して使用した。

2.2 授業の流れ

2017年度前期・後期ともに行った主な授業の流れを以下表1.に記す。

表1. 授業の流れ

| | 授業内 | 授業外 |
|----------|--|---|
| 1) 書く準備 | <ul style="list-style-type: none"> ・復習（前回の内容） ・練習問題 （文体、接続詞、段落、中心文・支持文、話しことばから書きことばへ、説明文、意見文） ・動機づけ ・構成を考える ・短文作成練習 | |
| 2) 書く | <ul style="list-style-type: none"> ・下書き作成（時間内に書けなかった場合は宿題） ・受講者の振り返り ・下書きのフィードバック （①対講師 ②ペアで読み合い） ・清書作成 | <ul style="list-style-type: none"> ・下書き作成（宿題） ・講師による添削 ・添削後の直し |
| 3) 書いた後で | <ul style="list-style-type: none"> ・読み練習 ・発表 ・クラス間で評価する | |

1) 書く準備

中級クラスは、表現方法が複雑になるので、初めて学ぶ表現方法、例えば「である体の書き方」、「書きことばの接続詞」を扱った際は、導入後練習問題を解いて十分に練習する時間を作った。その後、動機づけの時間ではブレインストーミングを行い、作文のテーマについてクラスで話し合ったり、構成をクラス全体で考えたりして、何を書くかを意識させた。

2) 書く

下書きの段階では、時々フローチャートを用いて段落構成を意識させた。慣れてきたころには、受講者自らメモ用紙に構成をメモするようになった。フィードバックの内容については、3.3節の授業内の活動で詳述する。

3) 書いた後で

読み練習→発表→クラス間の評価の順に進めた。以下に詳細を述べる。

- ・読み練習：自分が書いた作文が上手に読めるように各自で練習。講師は机間巡視し発音を指導。
- ・発表：ペアまたはグループになり、作文を読み合う。代表者が全体の前で発表。
- ・クラス間の評価：発表後、まず発表者が感想を言い、その後クラスメイトからフィードバックをもらう。クラスメイトは、フィードバック用紙に「質問」「感想」を記入し、発表後に口頭でフィードバックをする。

3. 2017年度前期

3.1 受講者の特徴について

2017年度前期の受講者は全4名（漢字圏3名、非漢字圏1名）であった。4名中1名が非漢字圏の受講者であったため、文法力と漢字力のレベル差が心配された。12週目から1名が自己都合で来なくなったので、受講者は3名（漢字圏2名、非漢字圏1名）となった。

3.2 授業内容

2017年度前期授業内容について、以下表2.に記す。

表2. 2017年度前期授業内容

| 回 | 内容 | 目標 |
|---|--|---------------------------------------|
| 1 | 1) 授業に関するオリエンテーション 2) 表記の仕方 3) 作文①「自己紹介文」 4) 宿題：作文①「自己紹介文」下書き | ・構成を考える ・句読点の使い方を覚える |
| 2 | 1) 表記（記号）について 2) 原稿用紙の使い方 3) 作文①「自己紹介文」のフィードバック 4) 宿題：作文①「自己紹介文」清書 | ・原稿用紙の使い方を学ぶ |
| 3 | 1) 文体について 2) 連用中止形について 3) 作文②「自分の国の習慣・マナーについて」 4) 作文①のフィードバックの続き 5) 宿題：作文②下書き | ・文体、連用中止形を覚える ・構成を考える |
| 4 | 1) 文体について復習、練習問題 2) 話しことばから書きことばへ 3) 叙述文（直接話法、間接話法） 4) 作文②のフィードバック 5) 宿題：作文②清書 | ・話しことばと書きことばの違いを明確にする ・叙述文の書き方を覚える |
| 5 | 1) 叙述文復習 2) 段落と中心文・支持文 3) 作文②清書の振り返り 4) 作文③「インターネットの問題点について」作成 5) 宿題：作文③下書き | ・段落に分けて書く ・中心文、支持文の書き方 |
| 6 | 1) 作文③クラス内で読み合い 2) 接続詞の使い方（順接・逆接の接続詞） 3) 宿題：作文③清書 | ・「ピア活動」を通じ、自律的に学ぶ |
| 7 | 1) 順接・逆接の接続詞の復習 2) その他接続詞について | ・接続詞について学ぶ |

| | | |
|----|---|--|
| | 3) 接続詞を使って文作 4) 作文③清書のフィードバック 5) 宿題：接続詞を使った短文作成 | |
| 8 | 1) 宿題「接続詞を使った短文作成」ペアで読み合い、全体シェア 2) 説明文について導入、練習問題 3) 説明文作文④「教室について」作成 4) 宿題：作文④「教室について」／作文⑤「自分の部屋について」 | ・「ピア活動」を通じ、自律的に学ぶ ・説明文を書く① (場所を説明する) |
| 9 | 1) 作文④発表、クラス内フィードバック 2) 作文⑤発表、クラス内フィードバック 3) 「ドラマの内容について」説明文の書き方 | ・説明文を書く② (場所を説明する) |
| 10 | 1) 作文⑥「ドラマの内容について」説明文の書き方続き 2) ドラマの映像を見る、作文⑥を書く、発表、フィードバック | ・説明文を書く (物語の内容を説明する) |
| 11 | 1) 意見文とは(事実文と意見文) 2) 作文⑦「レジ袋をもらわないほうがいい」 意見文の書き方導入後、各自意見文を書く 3) 宿題：作文⑦意見文「レジ袋を使わないほうがいい」 | ・意見文を書く (決められた意見を書く) |
| 12 | 1) 作文⑦のフィードバック、清書して提出 2) 作文⑧意見文「愛と結婚について」 3) 宿題：作文⑧作成 | ・意見文 (自分の意見を書く) |
| 13 | 1) 作文⑧フィードバック 2) ペアで意見文の発表、クラス全体でシェア | ・「ピア活動」を通じ、自律的に学ぶ |
| 14 | 1) 最終試験(①問題編 ②作文編) 2) コースの振り返り | |

初回の授業で「自己紹介文」を作成し、受講者の作文能力を測った。主な特徴は、「中級文型の文法的な間違い」「表記ミスが多い」「中級文型にとらわれ初級文型を忘れていた」というものだった。受講者たちは日本語で作文を書いたことはあるが、原稿用紙を使って書いたことがなかった。そこで、原稿用紙の使い方から説明をした。受講者の母国では、段落の書き始めは「2マス」空けることや、母国ではマス目に文字を書く習慣がないということもあり、原稿用紙の使い方は受講者にとっては新鮮なことのようだった。原稿用紙の使い方は紹介程度にとどめ、作文は主に罫線用紙を使用した。

受講者から、基礎からしっかり学びたいとの要望があったため、まずは基礎を固め、じっくり進めていくことにした。授業の流れの中では、特にフィードバックに時間をかけた。フィードバックで工夫した点を以下に記す。

3.3 授業内の活動

中級レベルになると、よく耳にする「話しことば」にも慣れてきたころである。作文では、「である体」で書くように指示をしたが、「話しことば」を使ったり、また丁寧な書き方として「です・ます体」で書いてしまったりという文体の混同がよく見られた。これらの誤用は自分で気づきやすいため、添削段階では下線を引く程度にとどめ、自らが誤用に気づくように添削をして返却し

た。

フィードバックの時間を受講者との「コミュニケーションの場」と位置付けた。作文を読んだだけでは、受講者の意図が汲み取れない場合があり、受講者と対話することで受講者が書こうとしている内容を理解することができた。

フィードバックの際は、まず受講者に自身の作文を振り返ってもらった。振り返りができている受講者は、「構成を直したほうがいい」「内容が浅かった」などの振り返りがあった。反対に、振り返りがあまりできない受講者は文法のミスばかり指摘する傾向があった。例えば、助詞の「に」と「で」の違いが分からない、どうして助詞の「で」は使えないのかなど、作文の全体像を見て捉えることができていなかった。

フィードバックは対講師型だけではなく、受講者同士で作文を読み合う「ピア活動」も取り入れた。受講者数分の作文をコピーし、全員の作文がクラス間で読めるようにした。これにより、自分の作文に対するクラスメイトの反応を直接見るすることができた。また、良かった点、改善点など厳しい意見をもらうこともできたので、ある程度の緊張感が生まれた。同じテーマであっても様々な意見があることや、クラスメイトがどのような作文を書いているのかを知る機会にもなったので、「いい刺激になった」という感想もあった。また、フィードバックは日本語で行うので、日本語でコミュニケーションを取る練習にもつながった。書いた作文は書きっぱなしにせず、振り返りまでを一区切りとした。振り返ることで、自分の作文を見つめ直し、次に書く作文はもっと相手に伝わりやすいように書こうというモチベーションにもつながった。

3.4 授業を振り返って

前期のクラスの受講者は学習意欲が非常に高かったため、初回の授業から最終授業までに上達が見られた。授業態度も真面目であり、メモをよく取っていた。復習もよくできていて、初めて学習した「連用中止形」「である体」は回を重ねるごとに慣れていった。最終目標を「論理的に説明文・意見文が書けること」としていたため、「作文の構成」も常に意識して書くように指導した。初級レベルの基本的な作文の書き方は理解していたため、比較的スムーズに授業が進んだ。3.1節でも述べたように、クラスで1名だけ非漢字圏の受講者がいたので、他の受講者とのレベル差が心配されたが、中級の表現力が乏しいだけで、理路整然と相手に伝わりやすい文章で書けるようになった。また、この受講者は一人だけ他の受講者と母語が異なったが、このことはプラスに働き、クラス内での日本語の発話の活性化につながった。特に、意見文「愛と結婚について」ではクラス内で白熱した意見交換が行われた。

コースの途中で、「接続詞」の使い方が分からないという意見があった。提出された作文を読んでいると、初級レベルの接続詞しか使えていないという印象があったので、受講者自らが苦手な点に気がついたことは良かったと思う。前向きに授業に取り組んでいた。

反省点としては、初級文型が定着していない受講者へのフォローがあげられる。「書く準備」の段階で、短文を書いて文法の定着確認を行い、その後に課題作成に取り組むというステップをもっと増やしてもよかったと思う。

4. 2017年度後期

4.1 受講者の特徴について

2017年度後期の受講者は全6名で、6名全員が漢字圏の受講者であった。N1合格者が2名いたこともあり、受講者のレベルも高いと予想された。

4.2 授業内容

2017年度後期授業内容について、以下表3.に記す。

表3. 2017年度後期授業内容

| 回 | 内容 | 目標 |
|---|---|--|
| 1 | 1) 授業に関するオリエンテーション 2) 表記の仕方／原稿用紙の使い方 3) 作文①「自己紹介文」 4) 宿題：作文①「自己紹介文」 | ・構成を考える ・原稿用紙の使い方に慣れる |
| 2 | 1) 作文①「自己紹介文」のフィードバック 2) 作文の読み練習、ペアでフィードバック、発表 3) 作文②「わたしの好きな歌」～『中級を学ぼう』第1課作文より 4) 宿題：作文②作成 | ・「ピア活動」を通じ、自律的に学ぶ ・作文を正確に読む |
| 3 | 1) 文体について 2) 連用中止形について 3) 話しことばから書きことばへ（副詞） 4) 作文②フィードバック 5) 作文③「自分の国と日本との習慣・マナーの違い」 6) 宿題：作文③作成 | ・文体、連用中止形を覚える ・話しことばと書きことばの違いを明確にする |
| 4 | 1) 文体・連用中止形の復習、練習問題 2) 話しことばから書きことばへ（副詞以外） 3) 作文③のフィードバック 4) 宿題：作文③清書提出 | ・文体の見直し ・話しことばと書きことばの違いを明確にする |
| 5 | 1) 作文③読み練習、発表 2) 文体について再々復習 3) 叙述文：直接話法から間接話法への変換 | ・書いた作文を正確に読む ・文体の定着 ・叙述文の書き方 |
| 6 | 1) 段落に分けて書く 2) 中心文と支持文について 3) 作文④意見文「インターネットについて」 4) 宿題：作文④提出 | ・段落に分けて書くことを学ぶ ・文章の構成を学ぶ ・意見文の書き方を学ぶ |
| 7 | 1) 作文④の分析 2) 『中級を学ぼう』第3課作文「日本へ来て分かったこと」を分析 3) 作文⑤「勘違い／失敗について」：作文の構成分析 | ・構成の分析 ・構成を練る |

| | | |
|----|--|--|
| | 4) 宿題：作文⑤提出 | |
| 8 | 1) 接続詞について（順接・逆接の接続詞） 2) 接続詞を使って短文作成練習 3) 作文⑤のフィードバック | ・作文の分析 ・「接続詞」の使い方を明確にする |
| 9 | 1) 作文⑤発表 2) 説明文「具体的な表現」「曖昧な表現」 ・『中級を学ぶ』第5課の表現を復習 ・場所を説明する短作文作成 3) 作文⑥：説明文「自分の部屋を説明する」 4) 場所を説明する際の「具体的な表現」「曖昧な表現」を復習 5) 宿題：作文⑥作成 | ・「ピア活動」を通じ、自律的に学ぶ ・具体的な表現を使って説明文を書くことを学ぶ ・説明文を書く① (場所を説明する) |
| 10 | 1) 復習：具体的な表現 2) 客観的に書く練習 3) 説明文のポイントを復習 4) 説明文練習「教室について説明する」、発表 5) 宿題：作文⑥再提出 | ・客観的に書くことを学ぶ ・説明文のポイントを確認 ・説明文を書く② (場所を説明する) |
| 11 | 1) 説明文のポイントを再確認 2) 作文⑥フィードバック 3) 作文⑥発表 4) 宿題：アニメーション映画「君の名は。」を説明するために必要な情報を箇条書きにしてくる | ・説明文のポイントを再確認する ・説明文を書く③ (物語の内容を説明する) |
| 12 | 1) 宿題の確認 2) 「ドラマの内容について」説明文の書き方 3) ドラマの映像を見る、説明文を書く、発表、フィードバック | ・映画やドラマの内容を説明するときのポイントを学ぶ |
| 13 | 1) 意見文について：事実文と意見文との違い 2) 意見文の文体について 3) 意見文を書く「愛と結婚について」「子供が携帯電話を持つことについて」「バスや電車の優先席について」「救急車の有料化について」 4) 宿題⑦「意見文」提出 | ・意見文の書き方を学ぶ ・意見文を書く (自分の意見) |
| 14 | 1) 最終試験（①問題編 ②作文編） 2) 作文⑦フィードバック 3) アンケート実施 | |

後期の受講者も原稿用紙を使って作文を書いた経験がなかったので、原稿用紙に作文を書く基礎的なことから授業を始めた。初回の授業では、口頭で簡単なアンケートを実施した。受講者全員が漢字圏の受講者であること、日本語で小論文を書いた経験があること、N1取得者も2名いたことから、文章表現能力も高いであろうと予想した。だが、予想に反し、初回の作文では、「文体の混同」、「作文を全体で数行しか書けない」、「時制ミス」、「形容詞と動詞の混同」、「字が雑で読みにくい」など問題が多数見られた。作文に慣れていないということもあったが、受講者の様子を見ながら授業を進めていく必要性を感じた。

また、前期の授業の反省をふまえ、「書く準備」の段階で短文を作成して文型を確認し、その後、作文作成に取り組むというワンステップを前期より増やした。

4.3 授業内の活動

後期も前期同様、授業内の活動は大きく変えなかった。後期もフィードバックに重点を置いた。後期のクラスには次の3つの問題があった。

- 1) 受講者の母語が同じであることから起こる問題
- 2) 漢字圏の受講者であることから起こる問題
- 3) 同じ間違いを繰り返すという問題

これらの問題に対応した授業内の活動を以下に述べる。

1)については、授業中の質疑応答などの発話は問題ないのだが、ペアやグループ活動において、日本語で意見を言うことを躊躇する傾向があった。母語が同じ者同士が日本語で会話することが恥ずかしい様子だった。また、フィードバックを受講者の母語で行ったり、フィードバック用紙を相手に見せるだけで、日本語で発話しなかったりということがあった。そこで、前期に比べて受講者同士でのフィードバックの時間を減らし、対講師型のフィードバックの時間を増やした。受講者達は、母国では講師と1対1で作文のフィードバックを受けたことがなく、講師から直接フィードバックを受けることができるのはうれしかったと言っていた。コースの途中からはフィードバックを母語で行うことを許可した。母語話者が集まった特性を活かすためと、母語のほうがより正確に意見が伝わるのであれば、それはそれで良いと考えたからだ。ただし、フィードバック中の発話内容を日本語でフィードバック用紙に書くように指示し、後でフィードバックの内容を日本語でまとめて発表させた。

2)については、漢字に関しては「分かる、読める、書ける」という自信があるのか、発表の際、自分が書いた作文の漢字が読めないということが続いた。そこで、毎回発表の前に「読み練習」の時間を加えた。前期は「上手に読むため」という目的で読み練習の時間を取ったが、後期は「自分の作文の漢字が読めるように」という目的で読み練習の時間を取った。毎回作文の発表を行うので、作文を書いているときにルビを振るなど事前準備ができるようになることを期待したが、毎回、読み練習の際に慌てて漢字にルビを振っていた。習慣化できるような指示が足りなかったと反省している。

3)については、フィードバックをしても、課題が変わるとまた同じ間違いを繰り返すということが続いた。例えば、「文体の混同」「話しことばで書く」「説明文で客観的な表現を使う」など受講者それぞれが間違えるポイントが同じなのだが、回を重ねても同じ間違いが繰り返された。そこで、復習コマを増やして気づきを促した。誤用文を板書すると、全員誤用に気づくのだが、それが自分の誤用文であることに気づいていないこともあった。誤用を自覚してもらう目的で、受講者それぞれの誤用文を板書しノートにメモを取ってもらった。「毎回作文を書くときは、このメモを見て書くように」とアドバイスしたが、翌週には「メモを失くした」「どこにメモをしたか分からない」などメモを取ることにあまり効果は見られなかった。結局ハンドアウトを配布して、毎回このハンドアウトを持って来るように指示した。クラス内には、個々の能力の差もあり、また様々な性格の受講者がいるので、それに順次対応していった。

4.4 授業を振り返って

最終試験は、「問題編」と「作文編」に分けて行った。「問題編」は授業中に練習をした「連用中止形」や「文体」の変換問題を中心に出题した。復習をしていれば、満点が取れる問題であった。試験結果は、前期クラスが90%~100%に対し、後期クラスは50%~90%の正解率だった。後期クラスは、同じ間違いが繰り返されたという点で復習不足は明らかであった。最終日に意識調査も兼ねて簡単なアンケートを実施した。アンケートの項目に「うちで復習をしたか」「添削された作文を見直し、間違いを確認したか」という項目を設けた。2項目とも「した」という解答が得られた。アンケート後にコースの振り返りを行った際、「文体の混同」がよく見られた点を指摘した。スピーチの原稿では「です・ます体」を使うので、混乱してしまったという振り返りが多かった。

間違いが続くことを毎回気にして対策を練っていたが、コース全体を振り返ってみると、最終目標である「論理的に説明文・意見文が書けるようになる」という目標は概ね達成できたと思う。特に説明文がよく書けていて、「教室を説明する」「ドラマの内容を説明する」では、描写が具体的かつ簡潔にまとめられていたので、どの受講者の説明文も分かりやすかった。後期のクラスは、日本語で意見を言い合うことを苦手としていたので、話し合う場を多く設けるより、クラスメイトがどんな作文を書いたのかが聞きたくなるような場を増やすなど、前期のカリキュラムから大きく発想を変えてもよかったかも知れない。例えば、「ドラマの台本を作る」「自分史」など受講者の興味があるテーマに変え、何か一つ心に残るものを作り上げてコースを修了してもよかったと思う。

5. おわりに

2017年度前期と後期の2学期間「文章表現C」クラスを担当したが、前期のクラスは比較的順調に進んだ。受講者の反応も良かった。後期のクラスに関しては、4.3節でも述べたように3つの問題点があったため、最終日に簡単なアンケートを実施した。「書く能力が上がったか」という質問項目では、「上がった」「少し上がった」という回答が多く、「授業は役に立ったか」という質問項目では、全員が「役に立った」という回答だった。説明文と意見文の作成に関する復習を繰り返し行い、ポイントの再確認などの確認作業が続いたが、「役に立った」と感じていたようで、繰り返し行った復習も無駄ではなかったと思う。

授業計画について反省点が多い。中級クラスだから難しい課題をこなさなければならないという先入観がまずあった。前期は順調に進んだが、後期に関しては、「書くことが楽しい」と思えるような授業計画をもう一度練り直す必要があったと思う。中級だから難しいことを行うのではなく、中級なら中級なりに楽しむことができ、「書くことが楽しい」と思える授業計画も立てる必要があった。例えば、4.4節でも述べたが、「ドラマの台本を作る」という授業計画を立てたとする。この授業では、クラスメイトがどんな作文(台本)を書いたのかを「聞く楽しみ」に加え、クラスメイトに自分が書いた作文(台本)を「聞いてもらいたい」という楽しみが加わり、それが「書く楽しみ」へと繋がったのではないかと思う。「論理的に説明文・意見文が書けるようになる」という学習目標に捉われ、「書くこと」だけにこだわってしまい、受講者の「書く楽しみ」を考慮することを忘れていた。楽しいだけでは良くないが、書くことへの興味に繋がる授業も必要であった。

参考文献

友松悦子（2016）『小論文への12のステップ』スリーエーネットワーク

アカデミック・ジャパニーズ研究会（2015）『大学・大学院 留学生の日本語②作文編』アルク

アカデミック・ジャパニーズ研究会（2015）『大学・大学院 留学生の日本語④論文作成編』アルク

大森雅美・鴻野豊子（2013）『作文授業の作り方編』アルク

石黒圭・安部達雄・有田佳代子・烏日哲・金井勇人・志賀玲子・渋谷実希・志村ゆかり・武一美・筒井千絵・二宮理桂（2017）『実践・作文指導』くろしお出版

年 報 編 (2017年 4月～2018年 3月)

| | |
|------------------------|----|
| 1. 日本語研修コース | 39 |
| 2. 日本語・日本文化研修コース | 52 |
| 3. 日本社会文化プログラム | 54 |
| 4. 全学共通教育 | 55 |
| 5. 年間行事 | 56 |
| 6. 交流ラウンジ | 69 |

資 料

| | |
|----------------|----|
| 岐阜大学留学生数 | 72 |
|----------------|----|

1. 日本語研修コース

1.1 2017年度前期（2017年4月～9月）

日本語研修コースには集中コース・一般コースそれぞれにレベル分けしたクラスがあるが、本学期から、一部クラス設定を変更した。前年度まで集中コースで開講していた中上級クラス（D）を一般コースに変更し、集中コースは初級（A）、初中級（B）、中級（C）の3レベル、一般コースは初級（A1）、初中級（B）、中級（C）、中上級クラス（D）の4レベルとした。ここに、学内公募による留学生48名（うち研究生19名、大学院修士課程22名、大学院博士課程5名、協定校からの学部あるいは大学院所属の交換留学生（特別聴講学生）2名）、及び留学生センター所属の留学生5名（日本社会文化プログラム4名、日本語・日本文化研修コース1名）の計53名が受講することになった。コースの申請者は集中コース12名、一般コース41名であった。

プレイスメントテスト及び面接の結果、集中コースAクラスが2名、Bクラスが6名、Cクラスが4名、そして一般コースA1クラスが9名、Bクラスが10名、Cクラスが10名、Dクラスが12名となった。

以下に本学期の集中コース・一般コースのスケジュールと各クラスの時間割及び授業報告をまとめる。

1.1.1 集中コース 第42期

- 4月11日（火） 開講式
- 4月12日（水） 授業開始
- 7月28日（金） 授業終了

[Aクラス]

時間割：全科目必修

| | 月 | 火 | 水 | 木 | 金 |
|---|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|
| 1 | 総合日本語A [秋山] | 総合日本語A [石井] | 総合日本語A [富田] | 総合日本語A [三輪] | 総合日本語A [野原] |
| 2 | 総合日本語A [吉成] | 総合日本語A [六郷] | 総合日本語A [吉成] | 総合日本語A [六郷] | 総合日本語A [村田] |
| 3 | 文章表現A [吉成] | 総合日本語A [石井] | | 口頭表現A [野原] | |

授業報告（Aクラス担任：吉成）

今学期の受講者は2名（学内公募の研究生1名、博士課程1名）で、国籍はガーナとイランであった。初めて日本語を学ぶ国費留学生と一般A1で学んだことのある大学院生2名だけのクラスなので、当初はレベルの差を心配した。しかし、初めての日本語学習に真面目に取り組む学生の努力、それを助けながら積極的に授業に取り組む学生のおかげで、授業を行う上での問題は感じられなかった。学生も少人数であることをメリットととらえていたようである。しかし、学期後半から博士課程の学生が様々な理由で休みがちになり、宿題提出も滞り、コースを途中放棄することになり、修了者は1名となった。

クラス人数に関わりなく、従来通り、「総合日本語A」では8名の教員によるティーム・ティーチングによって授業が進められ、『みんなの日本語I・II』（スリーエーネットワーク）を使用した。1名で授業を行うことも多く、受講者同士で行う会話・口頭練習など、従来のクラス活動ができないこともあったが、その学生に必要な活動を行うなど、個別の指導ができた。学生も一人になっても毎日休まず真面目にがんばってくれた。最終受講者が1名となるのは初めてのことであったが、今後も臨機応変に対応していきたい。

[Bクラス]

時間割：全10科目必修

| | 月 | 火 | 水 | 木 | 金 |
|---|----------------|------------------|----------------|----------------|----------------|
| 1 | 総合日本語B [富田] | 総合日本語B [橋本] | 総合日本語B [橋本] | 総合日本語B [六郷] | 総合日本語B [橋本] |
| 2 | 文章理解B [秋山] | 口頭表現演習BC [橋本] | 文章表現B [村田] | 口頭表現B [田辺] | 聴解演習B [野原] |

網掛けのクラスは、一般コースと共通開講

授業報告（Bクラス担任：橋本）

Bクラスは初中級レベルの受講生6名（学内公募の研究生6名（中国5、ベトナム1））であった。9月の修了判定の結果、途中帰国した1名を除き、5名が修了した。

Bクラスは初級レベルを終了した学生を対象とした初中級レベルのクラスで、これまで初級文法を正確に使いこなすことを目標とする。Bクラスでは、初級文法が十分身につけていない学生がいることを考慮し、初級文法復習（活用中心）を行ない、その後『中級へ行こう』（スリーエーネットワーク）をベースに初級文法の復習と運用練習を行なった。また、文章表現Bでは、習った文法項目の短文作成練習を行い、正確な文作成を目指した。また口頭表現については、モノローグ（スピーチ）を練習する口頭表現Bと、ダイアロー

グ（会話）を中心に練習する口頭表現BCを設けた。口頭表現BCは本学の全学共通教育との合同授業として、日本人学生と様々な活動や会話練習などを行なった。

今期のBクラスは、学生が6名と少ない人数であったこともあり、丁寧に進めることができた。自発的に発言する学生が多く、積極的に日本語を使おうとする努力が見られた。課題にも積極的に取り組み、質問も多く出て、活発なクラスになった。

[Cクラス]

時間割：全10科目必修

| | 月 | 火 | 水 | 木 | 金 |
|---|--------------------|------------------|----------------|--------------------|---------------|
| 1 | 総合日本語C(演習) [吉成] | 総合日本語C [吉成] | 総合日本語C [石井] | 総合日本語C [田辺] | 文章表現C [村田] |
| 2 | 聴解演習C [富田] | 口頭表現演習BC [橋本] | 文章理解C [石井] | 総合日本語C(文法) [野原] | 口頭表現C [田辺] |

網掛けのクラスは、一般コースと共通開講

授業報告（Cクラス担任：吉成）

受講者は中級前期レベルの学習者4名（日本社会文化プログラム学生2名、学内公募の研究生2名）、国籍は中国(3)、アメリカであった。「総合日本語C」の火・水・木曜日の3コマで『中級を学ぼう（中級前期）』（スリーエーネットワーク）を中心に、各担当が作成する副教材を使用しながら、中級文法項目を学習し、読解や作文などを行なった。毎週木曜日の「総合日本語C（文法）」は教科書から離れ、日本語能力試験N2程度の文法項目を学ぶ時間とした。毎週月曜日の「総合日本語C（演習）」は日本人学生との合同授業で言語学の基礎知識を学びながら、「読む・聞く・話す・書く」活動を通して日本語力を高める演習の時間とした。技能科目は5科目ですべての科目が必修である。

人数が少ない中で、真面目に授業や課題に取り組む学生が半分、不真面目な学生が半分で、最終的な成績にも差がはっきりみられた。1名は宿題をやってこない、無断欠席をする、そしてテストの点数も悪かったことから、成績不良で修了できなかった。人数が少なかったこともあり、個別に対応してきたつもりだったが残念な結果となってしまった。

1.1.2 一般コース

4月13日（水） 授業開始

7月28日（木） 授業終了

一般コースは、専門の授業を中心に受講し、空いている時間に日本語を勉強する学生を対象としたコースで、初級（A1）、初中級（B）、中級（C）の3レベルを設定していた。これに加え、前年度まで集中コースで開講していた中上級クラス（D）を今年度から一般クラスで開講することになり、一般コースは4レベルを設定して開講した。なお、一般A1クラスと一般Dクラスは、このコースを取る学生単独の科目となっているが、一般B・Cクラスは集中コースと共通に開講される科目となっている。

[A1クラス]

時間割

| | 月 | 火 | 水 | 木 | 金 |
|---|---------------|---------------|---------------|---|---------------|
| 1 | | | | | 日本語A1 [田辺] |
| 2 | | 日本語A1 [石井] | 日本語A1 [富田] | | |
| 3 | 日本語A1 [秋山] | | | | |

授業報告

一般A1クラスは、このコースを取る学生単独の科目となっている。日本語未習者対象のクラスで受講者は9名（研究生2名、修士課程6名、博士課程1名）である。初級レベルは文法積み上げで勉強を進めているので継続的な学習が必要であるが、専門の授業など多忙で、特定の曜日しか出られない、あるいは欠席が続くことで十分な学習ができない学生が多いことから、先学期から機能シラバス、場面シラバスのような形で（文法練習を中心にせずに）一つ一つの授業で学習項目が完結する授業を行なっている。教科書として使っている『にほんごではなしましょう』（らんぐ）は教材にローマ字を併記しており、文字学習をせずに学習を進めることができると考えたが、先学期末に行なったアンケートで文字学習への要望が多数あったので、今期は少しずつ文字練習も行なうことにした。専門の授業で忙しい中、受講生は熱心に授業に参加していた。

[Bクラス、Cクラス]

時間割（集中Bクラス、Cクラスと共通科目）

| | | 月 | 火 | 水 | 木 | 金 |
|-----|---|--------------------|---|----------------|--------------------|----------------|
| 一般B | 1 | | | 総合日本語B [橋本] | 総合日本語B [六郷] | 総合日本語B [橋本] |
| | 2 | 文章理解B [秋山] | | | | 聴解演習B [野原] |
| 一般C | 1 | 総合日本語C(演習) [吉成] | | | | |
| | 2 | 聴解演習C [富田] | | 文章理解C [石井] | 総合日本語C(文法) [野原] | |

授業報告

一般Bクラスは10名（研究生2名、修士課程7名、協定校からの交換留学生（特別聴講学生）1名）、一般Cクラスも10名（研究生2名、修士課程7名、博士課程1名）であった。

初中級以上のレベルになると、初級をどのように学習したかで学生のレベルに差が生じる。特に初中級レベル（B）では、集中コースのAクラスで半期15コマで集中的に学習した学生と、一般コースで初級を学習した学生とでは、理解力はともかく、口頭能力に大きな差が生じている。その差を埋めるだけの口頭能力の養成は、一般コースでは難しいので、クラスでは初中級レベルの文法項目の学習・理解に留まっているのが現状である。

一般Bクラス・Cクラス共に、学生は受講可能な授業を選択するが、学期後半になると授業に来なくなる学生が多い。選択した授業は必ず最後まで出席するよう伝えているにも関わらず、授業を途中放棄や成績不良で終わる学生が多いことは問題で、その対処を考える必要がある。

[Dクラス]

時間割

| | 月 | 火 | 水 | 木 | 金 |
|---|----------------|----------------|----------------|----------------|---------------|
| 1 | 総合日本語D [土谷] | 総合日本語D [六郷] | 総合日本語D [村田] | 総合日本語D [野原] | |
| 2 | | | | 文章理解D [三輪] | 口頭表現D [橋本] |

授業報告（Dクラス担任：土谷）

Dクラス（中上級クラス）は、従来集中コース（必修7コマ）で開設していたが、近年の本学留学生の日本語学習状況を鑑み、本学期より一般コースに変更した（経緯については、2016年度本紀要を参照のこと）。本学期は、総合D（週4コマ）、文章理解D（週1コマ）、口頭表現D（同）を提供したが、学生は最小1コマから最大6コマまで、専門科目の受講状況に合わせて柔軟に日本語科目を取れるようになった。

本学期のDクラス受講者は、12名（日本語・日本文化研修留学生（以下日研生）1名、日本社会文化プログラム（以下社会文化）学生2名、協定校からの学部所属の交換留学生1名、学内公募の研究生4名、同修士課程学生2名、同博士課程学生2名）で、国籍は韓国（1）、中国（11）であった。文章理解D・口頭表現Dには、先学期総合D等を受講した日研生3名も加わった。また、日研生と社会文化には、それぞれ専用の日本語科目が上記以外にも提供された。

受講者12名のうち11名が中国人留学生という、きわめて偏ったクラス構成となった。少し油断すると中国語が出てきてしまうこともあり、若干緊張感に欠けるきらいがあったが、全体として大きな問題はなかった。

本年度から一般コースとなり、柔軟に科目を受講することができるようにしたが、全科目必修が義務付けられている日研生と社会文化を除いた9名の受講状況を見ると、全6コマを選択した学生が6名、5コマが1名、2コマが2名であった。一般コースにした割には全6コマを選んだ学生が多い気がするが、先学期までの縛りであった7コマから1コマ減っただけでも、受講のしやすさが増したとも考えられる。出席不良・宿題提出不良等により総合Dを受講停止となった学生が1名発生したのは残念だったが、集中コースでは1科目が受講停止になるとコース全体を止めなければならなかったところ、本学期からは他の科目は継続できた。これも学生の利益と考えてよからう。一般コースにした功罪については、今後数学期検証を続けていきたい。

本クラスの学生には、留学生センターのかかわる各種行事への出席を奨励し、授業との振替の措置を取った（5月24日（水）郡上踊りワークショップ、7月19日（水）能楽ワークショップ）。

1.2 2017年度後期（2017年4月～9月）

日本語研修コースは、先学期同様、集中コースは初級（A）、初中級（B）、中級（C）の3レベル、一般コースは初級（A1）、初中級（B）、中級（C）、中上級クラス（D）の4レベルを開講した。ここに、学内公募による留学生65名（うち教員研修生1名、研究生35名、大学院修士課程15名、大学院博士課程9名、協定校からの学部あるいは大学院所属の交換留学生（特別聴講学生）5名）、及び留学生センター所属の留学生12名（日本社会文化プログラム4名、日本語・日本文化研修コース8名）の計77名が受講することになった。コースの申請者は集中コース23名、一般コース54名であった。

プレイスメントテスト及び面接の結果、集中コースAクラスが12名、Bクラスが5名、Cクラスが6名、そして一般コースA1クラスが21名、Bクラスが6名、Cクラスが13名、Dクラスが14名となった。

以下に本学期の集中コース・一般コースのスケジュールと各クラスの時間割及び授業報告をまとめる。

1.2.1 集中コース 第43期

- 10月6日（金） 開講式
- 10月10日（火） 授業開始
- 12月26日（火）～1月8日（月） 冬季休暇
- 2月8日（木） 授業終了

[Aクラス]

時間割：全科目必修

| | 月 | 火 | 水 | 木 | 金 |
|---|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|
| 1 | 総合日本語A [富田] | 総合日本語A [石井] | 総合日本語A [富田] | 総合日本語A [三輪] | 総合日本語A [秋山] |
| 2 | 総合日本語A [秋山] | 総合日本語A [六郷] | 総合日本語A [吉成] | 総合日本語A [野原] | 口頭表現A [野原] |
| 3 | 総合日本語A [吉成] | 文章表現A [吉成] | | 総合日本語A [田辺] | |

授業報告（Aクラス担任：吉成）

初めて日本語を学習する人だけでなく、自学学習あるいは大学の授業として勉強したことがある人など、学習経験は異なるが初級学習者でまとめられる12名（日本社会文化プロ

グラム学生1名、学内公募の研究生9名、博士課程1名、教員研修生1名)が受講した。受講生の国籍は中国(5)、バングラデシュ(3)、タイ、スリランカ、インドネシア、ケニアであった。

前期と同様、ティーム・ティーチングによる「総合日本語A」の授業を中心に初級文法を学び、「文章表現A」では作文を、「口頭表現A」では日常会話を学ぶ。『みんなの日本語I・II』(スリーエーネットワーク)を使用し、各課の新出語、文型をドリル練習や文作、会話など口頭練習を中心に授業が行われる。学生には授業外での予習・復習を求め、新しい課に入る際には予習内容を確認する文法・語彙の予習クイズを、学習した文法項目の理解度を確認するための文法復習テストを7回実施した。例年、漢字学習は授業で導入し、漢字プリントで自学学習した分を授業内でテストする形式で行ってきた。しかし、今学期はひらがな・カタカナの習得からつまづく人、授業についていだけで大変だという人も多く、まずは初級文法を身につけることを第一に考え、漢字クイズはやめ、担任の授業時間を調整し、漢字学習の時間を設けたり、クイズを自主的な宿題にしたりするなどの工夫を行った。

当初、すでに学習経験がある人、初めて日本語を学ぶ人など、人数の多さもあり、レベル差が大きく、授業を進める上で大変なことも多かった。しかし、学生の努力とクラスの雰囲気よさで、後半になるほど、問題は感じられなくなった。真面目に授業内外で日本語の勉強に取り組んでいた学生はテストの成績だけでなく、日本語会話能力の伸びも大きく、本人の努力の重要さを感じた。それは残念ながら修了に至らなかった学生を見ても感じられたことである。今学期は3名が修了に至らなかった。1名は健康上の都合で国へ帰ることとなり、1名は学期終了間際でありながら、大学院での専門の研究が忙しくなったとのことで、途中放棄することになった。もう1名は後半から授業を休みがちになり、その理由も不明なことが多かった。授業態度もまじめとは言いがたく、当初は既習者であったこともあり、成績も良かったが、さらなる上達は見られなかった。注意や警告をしたが、結局、出席が足りずに修了は認められなかった。大学院合格を目指す学生が多い集中Aクラスであるが、日本語を集中的に学べる時間が持てるのは貴重であることに気づいてほしい、大学院生が専門の研究と両立して集中コースで日本語を学ぶことの大変さを覚悟して参加してほしいと強く思った学期であった。

[Bクラス]

時間割：全10科目必修

| | 月 | 火 | 水 | 木 | 金 |
|---|----------------|------------------|----------------|----------------|----------------|
| 1 | 総合日本語B [秋山] | 総合日本語B [六郷] | 総合日本語B [橋本] | 総合日本語B [野原] | 総合日本語B [橋本] |
| 2 | | 口頭表現演習BC [橋本] | 文章表現B [石井] | 聴解演習B [六郷] | 口頭表現B [田辺] |
| 3 | | | | | 文章理解B [野原] |

網掛けのクラスは、一般コースと共通開講

授業報告（Bクラス担任：橋本）

今期のBクラスは初中級レベルの受講生5名（学内公募の研究生3名（中国3）、日本社会文化プログラム学生2名（アメリカ2））であった。2月の修了判定会議の結果、5名全員が修了した。

Bクラスは初級レベルを終了した学生を対象とした初中級レベルのクラスで、これまで初級文法を正確に使いこなすことを目標とする。初級文法が十分身につけていない学生がいることを考慮し、初級文法復習（活用中心）を行ない、その後『中級へ行こう』（スリーエーネットワーク）をベースに初級文法の復習と運用練習を行なった。また、文章表現Bでは、習った文法項目の短文作成練習を行い、正確な文作成を目指した。また口頭表現については、モノログ（スピーチ）を練習する口頭表現Bと、ダイアログ（会話）を中心に練習する口頭表現BCを設けた。口頭表現BCは本学の全学共通教育との合同授業として、日本人学生と様々な活動や会話練習などを行なった。

今期のBクラスは、学生が5名と少ない人数であったこともあり、丁寧に進めることができた。課題にも積極的に取り組み、質問も多く出て、活発なクラスになった。

[Cクラス]

時間割：全10科目必修

| | 月 | 火 | 水 | 木 | 金 |
|---|--------------------|------------------|----------------|---------------|----------------|
| 1 | 総合日本語C(演習) [吉成] | 総合日本語C [吉成] | 総合日本語C [石井] | 口頭表現C [田辺] | 総合日本語C [田辺] |
| 2 | 総合日本語C(文法) [橋本] | 口頭表現演習BC [橋本] | 聴解演習C [小寺] | | 文章表現C [秋山] |
| 3 | | 文章理解C [石井] | | | |

網掛けのクラスは、一般コースと共通開講

授業報告（Cクラス担任：吉成）

中級前期レベルの学習者6名（学内公募の研究生6名、すべて国籍は中国）が受講した。提供する科目数、「総合日本語C」（火・水・金）の授業内容等は、ほぼ前期と同様である。すでに高い日本語力を持っている学生もいたが、漢字圏出身だからこそその漢字の間違いや口頭表現能力の低さなど、それぞれに課題があった。また学期途中から、宿題を忘れる、遅刻するなどの学習態度に問題のある学生がおり、結果、1名が成績不良で修了することができなかった。みな大学院入試合格を目指す研究生であったが、必須である日本語学習に真摯に取り組む姿勢が必要であったにも関わらず、学習に対する積極性が見られなかった。全員が中国出身であったため、中国語を使用してしまう場面も多くあった。中級レベルのクラスでする必要があるのかとも思うが、母語の禁止を言い渡すくらいの厳しさが必要だったのかもしれない。

1.2.2 一般コース

10月11日（火） 授業開始

12月23日（金）～1月9日（月） 冬季休暇

2月10日（金） 授業終了

一般コースは、専門の授業を中心に受講し、空いている時間に日本語を勉強する学生を対象としたコースで、先学期からの変更で、初級（A1）、初中級（B）、中級（C）、中上級クラス（D）の4レベルを設定して開講した。なお、一般A1クラスと一般Dクラスは、このコースを取る学生単独の科目となっているが、一般B・Cクラスは集中コースと共通に開講される科目となっている。

[A 1 クラス]

時間割

| | 月 | 火 | 水 | 木 | 金 |
|---|-----------------|-----------------|-----------------|-----------------|---|
| 1 | | | | | |
| 2 | | 日本語 A 1 [石井] | 日本語 A 1 [富田] | 日本語 A 1 [田辺] | |
| 3 | 日本語 A 1 [秋山] | | | | |

授業報告

一般A 1 クラスは、このコースを取る学生単独の科目となっている。日本語未習者対象のクラスで受講者は21名（研究生 4 名、修士課程10名、博士課程 5 名、協定校からの学部あるいは大学院所属の交換留学生（特別聴講学生） 2 名）である。今期、一般A 1 クラスを受講した学生は20名と大勢になったが、それは先学期に一般A 1 を受講した学生のうち、今学期も継続して日本語受講を希望した学生が多かったが、現在A 1 の次のレベルのクラスは一般コースでは設定しておらず、再度A 1 クラスを受講することになったためである。今期の状況を踏まえ、来年度からA 1 に続くレベルのクラス（A 2 クラス・初級後半）を設定することにした。

初級レベルは文法積み上げで勉強を進めているので継続的な学習が必要であるが、専門の授業など多忙で、特定の曜日しか出られない、あるいは欠席が続くことで十分な学習ができない学生が多いことから、一般A 1 で機能シラバス、場面シラバスのような形で（文法練習を中心にせずに）一つ一つの授業で学習項目が完結する授業を組んでいるが、この授業を受講する学生の学習意欲はとても高く、文字学習、文法に対する質問などがあり、こうした要望に対応しながら授業を進めている。教科書は『にほんごではなしましょう』（らんぐ）を使用している。

[Bクラス、Cクラス]

時間割（集中Bクラス、Cクラスと共通科目）

| | | 月 | 火 | 水 | 木 | 金 |
|-----|---|--------------------|----------------|---------------|---------------|----------------|
| 一般B | 1 | 総合日本語B [秋山] | 総合日本語B [六郷] | | | 総合日本語B [橋本] |
| | 2 | | | | 聴解演習B [六郷] | |
| | 3 | | | | | 文章理解B [野原] |
| 一般C | 1 | 総合日本語C(演習) [吉成] | | | | |
| | 2 | 総合日本語C(文法) [野原] | | 聴解演習C [小寺] | | |
| | 3 | | 文章理解C [石井] | | | |

授業報告

一般Bクラスは6名（研究生2名、修士課程3名、博士課程1名）、一般Cクラスは13名（研究生8名、修士課程2名、博士課程2名、協定校からの交換留学生（特別聴講学生）1名）であった。

初中級レベルは、初級を一通り学習した学生を対象としているが、学習項目が違っていたり、また上記の一般A1を先学期に受講して初中級レベルに参加する学生は文法練習が少ないため他の学生より理解や練習に時間を要するなどの問題があるため、活用練習を中心とした初級文法の復習をしてから初中級の内容に進めることにしている。受講学生が多く、口頭練習の時間が十分に取れないことが課題の一つである。

一般Cクラスに関しては、先学期の課題であった、授業を途中放棄する学生の多さの対策として、学期初めにガイダンスを行い、選択できる4科目のうち、どれを履修するのかを届け出ることを義務付けた。途中放棄した場合は、今後受講することができないこと、提出しなければ今学期の授業を受けられないことも説明したところ、全員が届け出を提出し、途中放棄する学生は激減した。履修届が功を奏したのかは、来学期以降も続けて結果を見なければならぬが、専門授業の関係ですべての科目が受講できない学生の数の把握にもこの制度は有効であった。

[Dクラス]

時間割

| | 月 | 火 | 水 | 木 | 金 |
|---|---------------|----------------|----------------|----------------|----------------|
| 1 | | 総合日本語D [土谷] | 総合日本語D [小寺] | 総合日本語D [六郷] | 総合日本語D [野原] |
| 2 | 聴解演習D [富田] | | | 文章理解D [三輪] | 口頭表現D [橋本] |

Dクラスには日本語・日本文化研修コースの学生（以下日研生）が含まれるが、日研生は上記以外に日研生専用科目を受講する。詳細は第2章を参照のこと。

授業報告（Dクラス担任：土谷）

本学期のDクラス受講者は、14名（日本語・日本文化研修留学生（以下日研生）8名、日本社会文化プログラム（以下社会文化）学生1名、協定校からの学部所属の交換留学生2名、学内公募の研究生2名、同博士課程学生1名）で、国籍はオーストリア（1）、韓国（1）、タイ（1）、中国（10）、ハンガリー（1）であった。日研生と社会文化には、それぞれ専用の日本語科目が上記以外にも提供された。

全科目必修が義務付けられている日研生・社会文化以外の学生には全7コマを提供した。学生の受講コマ数は、6コマが2名、5コマが2名、1コマが1名で、一般コースにした柔軟性が前学期より生かされたと考えられる（ただし、1コマのみの学生は、最終課題を受けなかったため受講放棄となった）。

本クラスは、日本語はできるが大人しく省エネというのが特徴であった。日本語レベルは比較的高く、総合Dクラスでは、もう少し難しい教科書にしても良かったかもしれないと思うほどであった。しかし、教員が与えるものを大人しく黙って待つ、与えられたものは過不足無くこなすがそれ以上のことを自発的にすることはないという姿勢が目立ち（特に日研生）、その点は残念だった。中国人学生が多いうえに彼らがグループで固まってしまう、クラスとしてともに学び高めあう雰囲気醸し出されなかった。総合Dクラスの教材については、来年度に向けて検討するつもりである。

2. 日本語・日本文化研修コース

2.1 第16期（2016年10月～2017年8月）概要

第16期生は、大学推薦の国費留学生3名（タイ・カセサート大学、中国・電子科技大学、スウェーデン・ルンド大学）、私費留学生1名（各大学との大学間学術交流協定による交換数の枠内での受入れで、韓国・木浦大学）の合計4名だった。

第16期 履修／修了生（アルファベット順）

| | |
|------------------------------------|--------------|
| 許 竣碩 (Heo, Junseok) | 韓国・木浦大学 |
| 梁 霄 (Liang, Xiao) | 中国・電子科技大学 |
| モールupp・エミル (Marup, Emil Peter) | スウェーデン・ルンド大学 |
| シリワット・コッチャコン (Siriwat, Kodchakorn) | タイ・カセサート大学 |

例年通り、16期生も約1年におよぶ期間中、前半の秋学期に日本語と日本文化の科目を集中的に学び、後半の春学期には日本語と日本文化の授業に加えて、日本人学生と一緒に全学共通教育で開講されている授業を履修した。さらに、十二単衣の着装体験、「道の駅明宝 外国人誘客実践調査事業 岐大留学生参画プロジェクト」モニターツアー・郡上踊りワークショップ・能楽ワークショップへの参加、大相撲名古屋場所の観戦、土岐市での陶芸実作、茶道の実習など、伝統的な日本文化に触れる機会を数多く持った。

2.2 論文作成と発表会

本学の日本語・日本文化研修コースの特色のひとつは、修了論文の作成を重視していることにある。第16期生たちは、秋学期を終えて後半の春学期になると、それぞれの興味・関心にしたがってテーマを設定し、指導教員のもとで論文の作成に励んだ。今期生は例年よりも数が少なく、4名と少人数だったので、教員も時間的なゆとりがあってしっかりと指導することができた。学生たちもその指導によく応えてくれた。

論文提出後の8月6日には、今期で11回目を数える「留学生は“日本”をどう見たか」と題する研究成果の発表会を開催した。JR岐阜駅近くの本学サテライトキャンパスを会場として実施したが、例年以上の厳しい暑さのなか、本学関係者のほか多数の市民の参加もあり、活発な意見交換が行われて充実した発表会となった。

論文テーマと指導教員

許 竣碩 (Heo, Junseok)

「韓国人の日本認識について—姜沆 (カンハン) の『看羊録』を中心に—」

(指導教員：森田晃一)

梁 霄 (Liang, Xiao)

「日本人のあいさつ語の特徴及び日中あいさつ語の比較」

(指導教員：土谷桃子)

モールupp・エミル (Marup, Emil Peter)

「北欧人の行動様式—「ヤンテの法」とは何か—」

(指導教員：森田晃一)

シリワット・コッチャコン (Siriwat, Kodchakorn)

「日本人女性とタイ人女性の化粧意識・行動の比較」

(指導教員：土谷桃子)

2.3 履修科目

履修科目については以下の通りである (このほかに選択科目もある)。

必修授業科目の1週間あたりの授業数 (単位数) 1 授業 = 90分

| 授業科目 | 秋期 | 春期 | 合計 |
|-----------------------|---------|--------|---------|
| 総合日本語 | 5 (5) | — | 5 (5) |
| 全学共通教育科目 | — | 2 (4) | 2 (4) |
| 日本語読解演習 | 1 (2) | 1 (2) | 2 (4) |
| 日本語文章表現 | 1 (2) | 1 (2) | 2 (4) |
| 日本語発音・口頭表現 | 1 (2) | 1 (2) | 2 (4) |
| 日本語聴解演習 | 1 (2) | 1 (2) | 2 (4) |
| 現代日本の社会 | 1 (2) | — | 1 (2) |
| 近代化と日本人 | 1 (2) | — | 1 (2) |
| クロスカルチャー コミュニケーション | 1 (2) | — | 1 (2) |
| 日本の表象文化 | 1 (2) | — | 1 (2) |
| 地域実見—岐阜に学ぶ— | 1 (2) | — | 1 (2) |
| 論文指導 | — | 1 (1) | 1 (1) |
| 修了論文 | — | (4) | (4) |
| 合計 | 14 (23) | 7 (17) | 21 (40) |

3. 日本社会文化プログラム

3.1 受講概要

日本社会文化プログラムは、学術交流協定を結んでいる大学とからの交換留学生のうち、日本語、あるいは日本文化を学ぶ希望を持つ学生を留学生センターで受入れ、総合的な日本語・日本文化教育を行なうために開講したプログラムである。2007年度に開講し、2016年度は第19期となる。本プログラムは5つのコースを設けており（異文化理解コース1、異文化理解コース2、日本文化入門コース、日本社会文化コース1、日本社会文化コース2）、各学生のレベルに合わせてコースを設定している。

3.1.1 第20期（2016年度後期～2017年度前期）

2016年度後期に第20期の1名を迎えた。留学期間は1年間である。

異文化理解コース1と日本文化入門コースを受講し、所定の単位を取得した。

| | | | |
|-----------------|------|--------------|---------------------------|
| ガーデス レイシー マディソン | アメリカ | ノーザンケンタッキー大学 | 異文化理解コース1、 日本文化入門コース修了 |
|-----------------|------|--------------|---------------------------|

3.1.2 第21期（2017年度前期～2017年度後期）

2017年度前期に第21期の3名を迎えた。うち2名は留学期間は半年間、1名は1年間である。

2名は日本社会文化コースを受講し、所定の単位を取得した。

1名は日本文化入門コース、日本社会文化コースを受講し、所定の単位を取得した。

| | | | |
|--------|----|--------|-----------------------|
| オウ テイ | 中国 | 江南大学 | 日本社会文化コース修了 |
| ヒョウ ドウ | 中国 | 江南大学 | 日本社会文化コース修了 |
| ゼン アレイ | 中国 | 電子科技大学 | 日本文化入門コース、日本社会文化コース修了 |

3.2 社会文化プログラム専用科目

このプログラムでは、日本文化を実践的に学ぶ機会を提供するため、「日本文化へのいざない」という科目を設けている。2017年度前期の「日本文化へのいざない」は、本学客員教授で、茶道江戸千家副家元である川上紹雪氏に茶道に関する講義をお願いした。茶道に関する講義と共に、実際に茶道を体験する機会があり、日本文化理解の入門として、受講生には大変得るものがあった。

4. 全学共通教育

4.1 概要

留学生センター教員はそれぞれ、岐阜大学全学共通教育科目も担当している。日本語及び日本事情科目、人文科学科目の授業、また日本人学生と留学生の合同授業など、多様な内容・形態の授業を提供している。

4.2 2017年度 前学期

| 科目 | 授業名 | 時間 | 担当 | 備考 |
|--------------------|---------------|----|----|------------------------------|
| 日本語及 日本事情 科目 | 日本語D I—文章表現— | 月3 | 土谷 | 日本社会文化プログラム学生も受講 |
| | 日本語D III—聴解— | 月4 | 土谷 | 日本語・日本文化研修生、日本社会文化プログラム学生も受講 |
| | 日本事情A I | 火4 | 森田 | |
| 人文科学 科目 | 言語学入門—日本語学入門— | 月1 | 吉成 | 日本語研修コース集中・一般Cクラスも受講 |
| | 日本語口頭表現 | 火2 | 橋本 | 日本語研修コース集中B・Cクラスも受講 |
| | 日本近世史—近世都市史— | 水2 | 森田 | |

4.3 2017年度 後学期

| 科目 | 授業名 | 時間 | 担当 | 備考 |
|--------------------|---------------------------------|----|----|----------------------|
| 日本語及 日本事情 科目 | 日本語D II—文章表現— | 月3 | 土谷 | 日本社会文化プログラム学生も受講 |
| | 日本事情A II | 火4 | 森田 | |
| | 日本事情C II | 水2 | 森田 | 日本語・日本文化研修生も受講 |
| 人文科学 科目 | 言語学入門—日本語学入門— | 月1 | 吉成 | 日本語研修コース集中・一般Cクラスも受講 |
| | 日本文学—近世文学の世界— | 月2 | 土谷 | |
| | 日本語口頭表現 | 火2 | 橋本 | 日本語研修コース集中B・Cクラスも受講 |
| | 日本近世史—近世文化史— | 火2 | 森田 | |
| | 異文化論II—通過儀礼（人の一年） に見る世界の諸地域— | 水2 | 森田 | 日本事情C IIと同時開講 |

5. 年間行事

留学生センターでは年間を通じ、様々な行事を行なってきた。2017年度（2017年4月～2018年3月）の年間行事を一覧にまとめ、主な行事内容について報告する。

2017年

4月

日本社会文化プログラム、日本語研修コース開講式（4月11日）

日本語研修コース授業開始（4月12日）

5月

郡上踊りワークショップ（5月24日）

6月

岐阜大学夏期短期留学（サマースクール）受入開始（6月28日）

7月

ラウンジチューター企画“七夕まつり”イベント（7月5日）

能楽（能・狂言）ワークショップ（7月19日）

岐阜大学夏期短期留学（サマースクール）修了式及び歓送会（7月26日）

日本語研修コース授業終了（7月28日）

8月

日本語・日本文化研修留学生論文発表会（8月6日）

日本語・日本文化研修コース、日本社会文化プログラム修了式（8月22日）

10月

日本語・日本文化研修コース、日本社会文化プログラム、日本語研修コース開講式（10月6日）

日本語研修コース授業開始（10月10日）

11月

広西大学（中国、学術交流協定校）訪問（土谷桃子教授）（11月7日～9日）

講演会「マレーシアに向けた商品設計と企業展開」（11月24日）

12月

めいほうスキー学校 外国人向けプログラム開発 岐大留学生参画プロジェクト 民宿視察（12月17日）

ウィンタースクール日本語教育（12月6日～21日）

「十二単の着装と体験～日本の民俗衣装～」特別講義（12月13日）

2017年

1月

ラウンジチューター企画“日本のお正月”イベント（1月10日）

めいほうスキー学校 外国人向けプログラム開発 岐大留学生参画プロジェクト スキー学校モニター参加（1月21日）

2月

日本語研修コース授業終了（2月8日）

めいほうスキー学校 外国人向けプログラム開発 岐大留学生参画プロジェクト 外国人観光客対象スキー学校補助・観光プランモニター（2月17日～18日）

5.1 郡上踊りワークショップ

2017年5月24日（水）13：30～15：00、郡上踊りワークショップを実施した。以下に岐阜大学ホームページ「お知らせ」記事を転載する。

<https://www.gifu-u.ac.jp/news/news/2017/05/entry30-4999.html>

留学生センター 第6回郡上踊りワークショップを開催しました

本学留学生センターは、平成29年5月24日（水）、柳戸会館1階集会ホールにおいて、郷土芸能のひとつであり国重要無形民俗文化財の指定を受けている「郡上踊り」を学ぶワークショップを開催しました。当日は、留学生、日本人学生、教職員約30人が参加しました。このワークショップは、サマースクール（受入）郡上プログラムや本学との地域連携協定の締結などの交流実績がある郡上市との交流促進の一環として実施しているもので、今回で6回目の開催となります。

ワークショップが始まる前に、学生たちは、美濃市の国際交流支援グループ「せびあ会」の方々に浴衣を着付けてもらい、初めて履く下駄で郡上踊りに挑戦しました。色とりどりの浴衣を着たアメリカ、ガーナ、韓国、スウェーデン、タイ、中国、ペルー、マレーシア、そして日本の学生たちは、踊りが始まる前から写真を撮り合って大いに盛り上がりました。



ワークショップには、郡上踊りの本場、郡上市八幡町から遠藤光生氏、熊澤里重氏を講師としてお招きしました。最初に郡上市や郡上踊りの概要についての説明を聞いてから、郡上踊りの中で代表的な曲の「かわさき」と「春駒」の2曲の踊りを習いました。



最初は講師の踊りを追うのが精一杯だった学生たちも、最後にはリズム感よく楽しそうに踊れるようになりました。講師による「優秀踊り子」の選考では、4人の留學生が選ばれ、講師から賞品が手渡されました。また、参加者全員に「参加証」が渡されました。最後に全員で記念写真を撮り、盛況のうちにワークショップを終えました。

5.2 岐阜大学サマースクール（受入）

第30回サマースクール（受入）は、グローバル推進本部の全学事業として6月28日（水）～7月27日（木）に実施された。プログラム全体に関わる実務は、同本部留学基盤教育推進部門内のサマースクール（受入）作業部会が担当し、留學生センターは、日本語教育と日本文化体験（学外体験を含む）を担当した。



詳細については、留學生センターホームページのサマースクール（受入）ページ、サマースクール（受入）レポート（PDF）を参照されたい。



サマースクール（受入）ページ

http://www1.gifu-u.ac.jp/~isc/jp/international/summer_school/

サマースクール（受入）レポート（PDF）

https://www.gifu-u.ac.jp/international/newsletter/30_ss_report.pdf

5.3 能楽（能・狂言）ワークショップ

2017年7月19日（水）13：30～15：30、能楽（能・狂言）ワークショップを実施した（グローバル推進本部共催）。以下に岐阜大学ホームページ「お知らせ」記事を転載する。

<https://www.gifu-u.ac.jp/news/news/2017/07/entry28-5225.html>

「留学生と日本人学生のための能楽（能・狂言）ワークショップ」を開催しました

本学留学生センターとグローバル推進本部は共催により、7月19日（水）、柳戸会館集会ホールにおいて「留学生と日本人学生のための能楽（能・狂言）ワークショップ」を開催しました。当日はサマースクール参加学生、留学生、日本人学生、教職員等約60名の参加がありました。

能の講師として、観世流シテ方の味方團^{みかたまどか}先生と田茂井廣道先生、狂言の講師として、大蔵流狂言方の山口耕道先生と茂山良暢先生^{しげやまよしのぶ}の4名をお招きしました。

最初に、能の代表的演目のひとつである「石橋」^{しやつきょう}が披露されました。先生方の自己紹介の後、能楽の歴史や舞台についての説明や、シリアスな能とコメディの狂言の違いについての話がありました。

次に、能と狂言の面^{おもて}が5点示され、角度によって表情が変わることや、能面と狂言面に大きな違いがあることを知り、学生は思わず声を上げていました。

学生たちは実際に声を出して狂言の「大笑い」をしたり、謡曲「高砂」を謡ったりしました。普段の生活では出せないほどの大声を出して、すっかりした様子でした。狂言「寝音曲」^{ねおんぎょく}の鑑賞では、くすくす笑いがやがて会場全体を包み込む大笑いとなり、全身で日本文化を堪能する機会となりました。

ワークショップの最後に



は、サマースクール参加学生のひとりがモデルとなり、能装束の着付けが行われました。鬘をつけ唐装束を着した美しい姿と、鬼になった迫力ある姿、このふたつの装束が披露されました。

プロの方による本物の日本の文化を間近で見聞きし体験できるこのワークショップは、岐阜大学にとってかけがえのないイベントとして定着しています。

なお当日、CCN ケーブルテレビ、岐阜新聞、中日新聞が取材に訪れ、参加学生へのインタビューなどをしました。

今後も、留学生センター及びグローバル推進本部では、日本文化に触れる機会や、その魅力を学内外へ発信する機会を大切に、活動を展開していきます。

5.4 広西大学（中国、学術交流協定校）訪問

本学では、2016年度より協定校の広西大学（中国）にて、「岐阜大学事務系職員海外実務研修」を実施している。同大学に岐阜大学のオフィスが常置されていることから、本研修先に定められたと聞いている。広西大学からは、ほぼ毎年度日本語・日本文化研修留学生（以下日研生）を受け入れているため、日研生コースの修了生や現在留学中の学生を紹介するなど、派遣予定の事務系職員の活動を支援していたところ、本年度急遽留学生センター教員が同行することになった。

同研修は広西大学及び上海で約2ヶ月行われるが、期間中の2017年11月8日（水）に「岐阜大学フェア in 広西大学」が開催され、それに合わせて11月7日（火）～9日（水）に、応用生物科学部教員2名、事務系職員2名とともに留学生センター土谷が出張した。

3日間の出張中、初日と最終日は移動で潰れてしまったため、実質的な活動ができたのは1日のみであり、また突然に同行が決まったため先方も当方も十分な準備ができず、必ずしも有意義な出張であったとは言えない。しかし、日研生を多く受け入れておりながら、直接の接点を持つ機会がなかった広西大学に留学生センター教員が訪問したことの意味は小さくない。

本出張の目的は以下の2点であった。留学生センターとしては、②を主目的とした。

- ① 「岐阜大学フェア in 広西大学」参加
- ② 広西大学日本語担当教員との情報交換
 1. 広西大学、岐阜大学双方における日本語・日本文化教育
 2. 学生派遣・受入の事務手続き

それぞれの成果について述べる。②1.の両校の日本語・日本文化教育についての情報交換は、出張中に面談できたのが日本語科の大学院教育担当の教員1名のみであったため、日研生の派遣元である学部の日本語教育について情報が得られなかったのは残念であった。

岐大フェアをボランティアで手伝ってくれた大学院生と話す機会は多かったが、広西大学の学部からそのまま院に進学した学生がおらず、そこからも情報を得ることができなかった。逆に、先方教員にとっては、大学院生を日本に留学させたいという強い希望があり、岐大に派遣する方法や可能性について直接聞き取りができたのは収穫であったろう。ただし、留学生センターは大学院生の受け入れはできないので、各研究科で受け入れることになる。

事務手続き(②2.)については、岐大からの連絡がうまく先方に伝わっていないことが今まで何度となくあったため、改善策を検討した。その結果、今後広西大学に学生交流等の連絡をする場合、従来の連絡先に加えて今回面談した日本語科大学院教育担当の教員にも通知することで合意した。

日本語関係者以外との面談では、当日朝に国際教育学院副院長との面談が急遽手配された。同学院は、広西大学に留学してくる外国人留学生に対する教育を担当している。留学生センターは、日本人学生派遣には関与しておらず、先方が必要とする情報を提供することはできなかったが、同学院の行う中国語授業の情報を、岐大で中国語教育を担当する教員に帰国後提供した。

今回の出張での最大の成果は、広西大学の日研究生コース修了生との再会である。前年度に帰国した15期日研究生は、出張期間中常にアテンドをしてくれ、岐大フェアではボランティア大学院生とともにさまざまに協力してくれた。もう1名、ほぼ10年前に岐大で学んだ6期日研究生にも再会した。この学生は、大学院修了後の動向が全く分からなくなっており、どうしているのか心配していた学生であった。現地で偶然出会った日本人との話から当該学生が元気に広西大学近辺で働いていることが分かり、奇跡の再会をすることができた。この再会だけでも、今回の出張は意義があった。

5.5 岐阜大学秋の国際月間講演会『マレーシアに向けた商品設計と企業展開』

岐阜大学は、マレーシア国民大学(UKM)と2016年9月21日に学術交流協定を締結した。同大学とは、本学自然科学技術研究科・工学研究科とのジョイント・ディグリー(JD)プログラムが2019年度開始予定で、その前哨戦に位置づけられるウィンタースクールに参加学生が送られている。また、本年度初めてサマースクール(受入)にも参加があった。今後ますますの交流が見込まれるUKMでどのような日本語教育が行われているか、留学生センターとして情報収集すべきとの考えから、人文科学部外国語・翻訳学科日本語部の日本語教師アズヌール・アイシャ・アブドゥッラー氏と面談する機会を得た。運よく氏は本年度東京外国語大学言語文化学部マレーシア語学科に特定外国人講師として赴任しており、面談には絶好の機会であった。

その席で本学への招聘を打診したところ快諾を得、グローバル推進本部・留学生センター共催で講演会を開催することとなった。以下に岐阜大学ホームページ「お知らせ」記事を転載する。

<https://www.gifu-u.ac.jp/news/news/2017/12/entry08-5702.html>

【秋の国際月間】講演会「マレーシアに向けた商品設計と企業展開」を開催しました

11月24日（金）、秋の国際月間の一環としてマレーシア国民大学と東京外国語大学で教鞭をとられているアズヌール・アイシャ・アブドゥッラー氏と経済産業省クールジャパン海外戦略室長である手島恵美氏をお招きし、講演会「マレーシアに向けた商品設計と企業展開」を本学アクティブ・ラーニング教室にて開催しました。

講演会において、アズヌール・アイシャ・アブドゥッラー氏からは「商品設計に欠かせないもの（文化・言語）」という題目で、日本の製品がマレーシアにて販売される際、製品表示が現地の方にどのように解釈されるか等について身近な製品を例として引き合いに出されながら語られました。また手島氏からは「マレーシアに展開する日本企業」という題目で、日本企業のマレーシア進出について、進出先や進出形態、ハラル対応等進出する際に企業が留意していること等が語られました。

講演後のアンケートでは、「マレーシア市場で何が求められているかが分かった」「マレーシアにはこんなに様々な日本企業が進出していること、日本の食べ物やサービスが受け入れられていることを知り、親近感が湧いた」等の意見があり、マレーシアと日本のつながりを大いに実感できる講演会となりました。



5.6 岐阜大学ウィンタースクール

今年度、第3回のウィンタースクールが行われた（12月6日（水）～21日（木））。ウィンタースクールは、グローバル推進本部の事業で、留学生センターは日本語教育を担当した他、本センター主催の十二単の着装と体験（p.64）をウィンタースクールプログラムの

一部として提供した。また、地歌舞伎鑑賞と馬籠散策を含む東濃エクスカージョンにも、教員1名が引率として参画した。以下に岐阜大学ホームページ「お知らせ」記事を転載する。

<https://www.gifu-u.ac.jp/news/news/2017/12/entry22-5745.html>

グローバル推進本部：第3回ウィンタースクールを開催しました

グローバル推進本部は、12月6日（水）から12月21日（木）にかけて、本学として3回目の実施となるウィンタースクールを開催しました。本年度も前年度と同様に、ジョイント・ディグリープログラム（連携する大学間で開設された共同プログラムを修了した際に、複数の大学が共同で単一の学位を授与するもの）の設置を視野に入れ、インド工科大学グワハティ校（IITG）とマレーシア国民大学（UKM）から計7名の学生を受け入れました。

本プログラムでは、両校ともに10倍以上の倍率の中から選ばれた学生たちが、工学部、応用生物科学部の研究室で研究体験を行いました。また、本年度初の講座である“Japanese Rice Ball Project”では、3チームに分かれた学生たちが、アイデアと独創性にあふれた、おいしいおにぎりを目指して協力しました。その他、留学生センターが提供する日本語授業を受講するほか、IITG教員、UKM教員による特別講義を受講しました。3週間に凝縮された岐阜大学での留学体験では、キャンパスライフ以外にも、地域企業での企業見学や学内外で実施される日本文化体験イベントに参加しました。



このプログラムを通して岐阜大学での学生生活を体験することで、参加学生はもとより本学学生や両校の教職員にとっても、今後推進すべき国際協働教育のより良い理解と促進につながることを期待しています。



なお、詳細については、ウィンタースクールレポート（PDF）を参照されたい。

<https://www.gifu-u.ac.jp/28eeebb0ac8f6d0b0886d54051aedd2f.pdf>

5.7 十二単の着装と体験

2017年12月13日（水）14：00～15：30、十二単の着装と体験を実施した。以下に岐阜大学ホームページ「お知らせ」記事を転載する。

<https://www.gifu-u.ac.jp/news/news/2017/12/entry19-5726.html>

「十二単の着装と体験 ー日本の民族衣装ー」を開催しました

本学留学生センターは、12月13日（水）、柳戸会館集会室（和室）において、特別講義「十二単の着装と体験 ー日本の民族衣装ー」を開催しました。

当日は、留学生センター所属の日本語・日本文化研修コースの留学生（以下日研生）をはじめ、本学に在籍する留学生や日本人学生及び教職員、更に今年度第3回を迎えたウィンタースクールプログラムに参加しているインド工科大学グワハティ校とマレーシア国民大学の学生等40人を超える参加者がありました。

この講義は今年度で4回目となり、「本物にふれる」という留学生センターのコンセプトに基づき、本学の学生を対象とした日本文化の体験型授業の一環として開催したものです。講師は、和服の着付けを専門に指導されている伊藤慶子氏、佐藤千里氏他5名の方々でした。講師の方々は紋付・袴の正装で立ち合わせ、会場に雅楽のBGMが流れる荘厳な雰囲気の中で行われました。

留学生センターの土谷教授から、日本語・英語両言語で十二単の歴史や基礎知識について説明があったのち、モデル希望者の中から選抜された日研生のフィオナ・ヘルさん（オーストリア）が、小袖と袴、化粧の下準備をし、髪に宝冠を付けて会場に入室しました。

十二単の着付けでは、講師の先生方は作法に従い、「お方様^{かた}」であるフィオナさんに敬意を表しながら、^{いつぎぬ}五衣、^{うわぎ}表着、^{からぎぬ}唐衣、^も裳を順に着付けました。留学生たちは、赤や緑のきらびやか



な衣をまとっていきの様子に興味深く見入っていました。着付け終了後の質問の時間になると「トイレに行くときどうするのですか」「着物の色や柄の意味は何ですか」などの質問があり、伊藤先生からお答えいただきました。その後、十二単に檜扇ひおうぎを持ったフィオナさんを囲む記念撮影の輪ができました。

十二単は重ねたままスルッと脱げ、脱いだ後も人が座っているように見えます。それを「空蟬うつせみ」といいます。その空蟬の中に男女を問わず学生は次々と入り、重さを実感し、しきりと友だち同士で写真を取り合っていました。

本講義は、日本の伝統文化の奥深さ、美しさを堪能することができた有意義なひと時となり、日本文化教育の充実にもつながる画期的なものとなりました。

5.8 めいほうスキー学校 外国人向けプログラム開発 岐大留学生参画プロジェクト

2015年度より、郡上市明宝地域におけるインバウンド観光振興に、留学生センター所属の日本語・日本文化研修留学生（以下日研生）が協力するプロジェクトを行っている（2015年度「郡上明宝観光モニターツアー」、『岐阜大学留学生センター2016』p.95参照、2016年度「道の駅明宝 外国人誘客実践調査事業 岐大留学生参画プロジェクト」、『岐阜大学留学生センター2017』p.61参照）。2017年度は、外国人向けスキープログラムの開発と、それに付随する民宿改善について、日研生が協力した。なお、日研生17期生は、オーストリア1名、韓国1名、タイ1名、中国4名、ハンガリー1名の計8名である。

具体的な活動は、明宝スタッフによる講義（11/16、2/8）、民宿視察（12/17）、スキー学校モニター参加（1/21）、外国人観光客対象スキー学校補助・観光プランモニター（2/17-18）の4つであった。以下それぞれについて詳述する。

1) 明宝スタッフによる講義（11月16日（木）、2月8日（木））

11月16日は、本年度の活動を開始するに当たり、明宝スタッフと学生との顔合せを兼ねた講義を行った。明宝地域の紹介、本年度のプログラムで学生に期待されること等について説明と意見交換を行った。スキー学校に関する活動内容があるため、明宝より持参いただいたスキー用具に実際に触れながら話を聞くことができた。

2月8日は、すでに民宿視察（12/17）、スキー学校モニター（1/21）を経ているため、それぞれの経験を踏まえての活動を行った。民宿体験については、学生に「親しい人を明宝に誘うとしたら」という仮定で母語・日本語で手紙を書いてもらい、それを今後のPR活動に生かしていくことになった。スキー学校モニターについては、スキー初心者が参加した場合の安全性、楽しさ、値段設定等についてのアンケートを実施した。また、2/17-18の1泊2日のプログラムについての確認も行った。

2) 民宿視察 (12月17日 (日))

郡上明宝の「自然食泊 愛里」を訪れ、料理体験、食事体験、「民宿の不便探し」活動を行った。料理体験では、明宝の伝統食である「つぎ汁」を、愛里の女将に学びながら作った。昼食には、そのつぎ汁とともに、地域の恵みをふんだんに盛り込んだ和食を堪能した。その後、民宿とレストラン内を2グループに分かれて探索し、外国人観



2017年12月17日 (日) 民宿視察

光客が訪問した場合の不便さを探索した。まとめとして、グループごとに見つけた不便さと解決の提案を発表した。「靴をどこで脱ぐのか分かりにくい」、「言語の表示も必要だが、絵や図があるといい (例：風呂の入り方)」、「クレジットカードが使えると便利」等の声が上がリ、その場で回答可能なものについては女将から丁寧な説明があった。

3) スキー学校モニター参加 (1月21日 (日))

めいほうスキー学校には、外国人からスキーレッスンを受けたいとの問合せがある。現在は、そのような顧客に対して言語的なサポートを提供していないが、今後の可能性を探るために、日研究生が通訳としてレッスンのサポートに入ることが提案された。その活動を実施する前に、日研究生自身がめいほうスキー学校のレッスンを体験することになった。

日研究生8名中全くのスキー初心者が5名で、初心者向けのプログラム内容の確認には適当であった。ウェアや道具の貸し出しからスキー場での昼食、レッスンと一通りの体験をし、2/17に備えた。スキー経験者3名は、リフトに乗って山頂から滑り降りる機会も与えられた。



2018年1月21日 (日) スキー学校モニター参加

4) 外国人観光客対象スキー学校補助・観光プランモニター (2月17日 (土)～18日 (日))
1/21のスキー学校レッスン体験、2/8の事前確認を経て、1泊2日で郡上明宝を訪問した。



2018年2月17日（土）～18日（日）外国人観光客対象スキー学校補助・観光プランモニター

日程は以下の通りである。

2月17日（土）

- 9：30 岐阜大学発
- 11：30 めいほうスキー場着、打合せおよび昼食
- 13：00 スノーシュー体験
- 15：30 明宝温泉「湯星館」にて休息・スノーシュー体験振り返り・夕食
- 18：30 スノーモービル体験
- 20：00 「湯星館」にて入浴後、旅館くごへ移動、宿泊

2月18日（日）

- 8：00 旅館くご発
- 8：30 めいほうスキー場着、打合せおよび準備
- 10：00 スキーレッスンサポート
- 12：00 昼食
- 13：00 全体振り返り、スキー学校およびスキー場関係者との意見交換
- 14：30 明宝スキー場発
- 16：30 岐阜大学着

本活動の主なポイントは、以下の2点である。

- ① 外国人のスキーレッスン受講希望者に対し、どのような言語サポートをどう行えばよいか。日研究生がサポーターとして実際に体験し、フィードバックをする。
- ② 現在はメニューとして提供していないもの（スノーシュー、スノーモービル）を日研究生がモニター体験をし、フィードバックをする。

それぞれについて概括する。①については、当日ベトナム人4名、台湾人1名、アメリ

カ人1名のレッスン受講希望者があり、日研生のうちスキー経験がある者3名がサポート役を担った。ベトナム人4名は日本で働いているため日本語可であった。他の2名は英語でのサポートを要した。

今回が初めての試みであったため、サポート役の役割が不明瞭だったり、日研生自身が必ずしも英語やスキーに堪能でなかったりしたため、戸惑うことも少なくなかったが、初歩的なことを自発的に教えたり、日本語のできない受講者がトイレに行きたいといったときにサポート役の日研生が同行したりと、臨機応変に対応した。事後の振り返りでは、「サポート役の役割をしっかりと決めたほうがいい」「インストラクターとサポート役との事前の打合せが必要」「サポート役自身のスキー技術の向上が必要」といった意見が、活発に日研生から出た。

もう1点の②については、概ね高評価が出た。スノーシューは全員が初体験で、新雪の中道なき道を歩くのを楽しんだ。フィードバックでは、「ただ歩くだけではつまらないので、途中でお茶を飲む時間を設けたり、写真を撮ったり遊んだりできる自由時間がほしい」という意見が出た。スノーモービルは、夜の雪山を疾走して山頂に登り、ライトアップされた雪山を堪能した。残念ながら天気が悪く星空は望めなかったが、それでもこの活動はほぼ全員が面白かったと反応した。その他、温泉入浴も高評価であった。

郡上明宝地域との連携事業が複数年度にわたって行われていることは、留学生センターの活動成果として誇るべきものである。次年度以降への継続の価値は十分あるものと認識している。その中で、反省・改善すべき点も見えてきつつある。主要な懸念は、年度を越えての連携がうまくできるかという点である。前年度の道の駅や民宿における岐大留学生の活動のフィードバックが本年度どのように生かされているか、本年度の成果が次年度以降にどう引き継がれるか、人事異動の影響もあり、明確とは言いがたい。明宝地域と岐大という場所・組織の連携とともに、前年度・本年度・次年度という年度の連携の重要性を再認識した。

なお、これまでの活動を踏まえて、2018年2月22日には仲介業務に携わる（株）杉インターフェイス社長高田由香氏とともに、本センターの土谷が郡上市長と面談をした。

6. 交流ラウンジ

2012年4月、留学生センターに「交流ラウンジ」が設置されてから、6年になる。そして2017年4月の留学生センター移転（共通教育棟4階）に伴い、交流ラウンジの場所も変更となった。少し狭くなったが、ラウンジにはソファやテーブル・椅子を配置し、教育用パソコン・プリンターも設置されており、基本的な機能は変わらない。本稿では、2017年度にこのラウンジで行われた活動や、利用状況などを報告する。

6.1 ラウンジチューター活動

交流ラウンジは多目的に活用されているが、中心となるのはラウンジチューター活動である。学期中の平日午後2時45分から4時45分の2時間、1～2名の日本人学生がチューターとして常駐し、ラウンジにやってくる留学生と日本語で交流する場を提供している。

活動時間内にやってくる留学生の目的は様々だが、日本語クラスの宿題チェックやレポートの添削など、日本語学習に関わる活動を目的とする学生が多い。自主的にラウンジを訪れる学生もいるが、まだ日本語での会話に慣れていない学生は利用するのにためらいがあるようだ。また学期初めはチューター活動が行われていることを知らない留学生もいる。そこで、留学生センターの日本語コースやプログラムではラウンジチューター活動の広報を行ったり、文作宿題はチューターチェックを受けるよう指示したり、チューターへのインタビュー課題を出したりなど、授業との連携も行い、留学生のラウンジ活用を勧めている。最初は戸惑う留学生も、宿題を見てもらっただけでなく、世間話をしたり、母国と日本の文化の違いなどについて話し合うなど、自由な会話も楽しめるようになっていった。

毎日のラウンジチューター活動だけでなく、年に二回、ラウンジチューター主催による



七夕まつり



お正月イベント

留学生向けのイベントを開催している。2017年7月5日（水）には「日本の七夕まつり」（参加者36名）、2018年1月10日（水）には「日本のお正月」（参加者36名）をテーマにしたイベントが行われた。毎年恒例行事になっているが、七夕イベントでは、墨と筆で願い事を書いた短冊を笹の葉に結び付けたり、ゲームをしたり、日本人学生と留学生との交流が図られた。ただ、以前よりラウンジスペースが狭くなったため、サマースクール参加学生も含め30人以上入った会場ではすれ違うことも困難で、大変暑かったという声も多かった。そこでお正月イベントでは、隣室の404教室を借りて行われた。

6.2 ラウンジの利用者数

ラウンジがどのくらい利用されているのかを把握するため、開設当初からのべ利用者数をまとめている（表1）。昨年度同様、ラウンジチューターイベント（七夕まつり、お正月イベント）の参加者を除いた数としているため、全体としては2015年度以前よりも人数は減少しているように見えるが、昨年度に比べると利用者数は増えている。

利用目的別（チューター活動参加、パソコン利用、相談・問い合わせ、資料閲覧、その他）にラウンジ訪問者数を調査したところ、大まかな人数の把握でしかないが、ラウンジに設置してあるパソコンやプリンターを使用する目的で来訪する留学生が昨年度に引き続き、多いことがわかった。ただし、後期にラウンジに常設しているパソコンを Windows 10 に変更したことで、不具合が生じ、実際に使用できないことも多く、利用者には迷惑を

表1. ラウンジの利用状況（チューター配置時のみ。利用者数には日本人学生含む）

| 年度 | 前期配置期間と利用者数 | 後期配置期間と利用者数 | 合計 |
|------|-----------------------------|----------------------|------|
| 2017 | 4月17日～7月26日 330人（金曜日は閉室） | 10月10日～2月7日 296人 | 626人 |
| 2016 | 4月18日～7月28日 209人（金曜日は閉室） | 10月11日～2月10日 348人 | 557人 |
| 2015 | 4月13日～7月31日 354人（金曜日は閉室） | 10月12日～2月4日 301人 | 655人 |
| 2014 | 4月14日～7月31日 543人 | 10月14日～2月10日 438人 | 981人 |
| 2013 | 4月15日～8月2日 420人 | 10月10日～2月7日 333人 | 753人 |
| 2012 | 5月28日～8月3日 310人 | 10月10日～2月8日 558人 | 868人 |

かけることとなった。年度末にやっと問題なく使用できるようにはなったが、後期利用者数の減少の一因とも考えられるため、今後はラウンジ内の設備にも気を配り、環境を整えていきたい。

ラウンジは、ラウンジチューター活動以外にも、日本語研修コースクラス発表、個人チューターの指導、学生との面談等、様々な用途で使用されている。また、日本人学生向けの海外留学や学術交流協定校に関する資料、留学経験者の報告書もあり、留学に関する情報収集をすることもできる。ラウンジの壁面には留学生センターで行われた様々なイベントの写真や、サマースクール（派遣）参加学生が留学報告会用に作成したポスターなどを掲示している。これからも、誰もが気軽に利用できる場となるよう、環境づくりや広報活動にも力をいれていきたい。



交流ラウンジ

岐阜大学外国人留学生数（在籍別）

| 研究科・学部等 在籍身分 | 教育研究科 教育学部 | | 地域科学 地域科学 研究科 | | 医学研究科 医学部 | | 工学研究科 工学部 | | 応用生物科学 研究科 | | 自然科学技術 研究科 | | 連合農学 研究科 | | 連合獣医学 研究科 | | 流域圏科学 研究センター | | 生命科学 総合研究支援 センター | | 留学生 センター | | | 計 | | 合計 | |
|-----------------|---------------|---|---------------------|----|--------------|---|--------------|----|---------------|----|---------------|----|-------------|----|--------------|----|-----------------|---|------------------------|---|-------------|-----|-----|----|-----|-----|-----------|
| | 国 | 私 | 国 | 私 | 国 | 私 | 国 | 私 | 国 | 私 | 国 | 私 | 国 | 私 | 国 | 私 | 国 | 私 | 国 | 私 | 国 | 私 | 国 | 私 | 国 | 私 | 男女別 合計 |
| | 費 | 費 | 費 | 費 | 費 | 費 | 費 | 費 | 費 | 費 | 費 | 費 | 費 | 費 | 費 | 費 | 費 | 費 | 費 | 費 | 費 | 費 | 費 | 費 | 費 | 費 | 費 |
| 学部 | | 1 | | | 5 | | 2 | 1 | 8 | 14 | | | | | | | | | | | | | 1 | 8 | 24 | 33 | 48 |
| 大学院（修士課程） | | | 1 | | 8 | | | | 9 | 2 | 21 | | | | | | | | | | | | 4 | 46 | 50 | 103 | |
| 大学院（博士課程） | | | | | 18 | | | 1 | 9 | 2 | 13 | | | | | | | | | | | | 3 | 5 | 53 | | |
| 研究生 | | | | | | | | 1 | 4 | 2 | 18 | | | | | | | | | | | | 29 | 4 | 47 | 80 | 144 |
| 特別聴講学生 | | | | | | | | 1 | 4 | 2 | 13 | | | | | | | | | | | | 17 | 4 | 43 | 64 | |
| 特別研究生 | | 1 | | | 10 | | | 2 | 12 | 1 | 3 | | | | | | | | | | | | 1 | 31 | 32 | 56 | |
| | | | | | 14 | | | 1 | 1 | | 2 | | | | | | | | | | | | 2 | 22 | 24 | 24 | |
| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| | | 1 | | | 2 | | | | | | 1 | | | | | | | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | | 2 | | | | | | | | | | | | | | | | |
| | | 1 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 日本語・ 日本文化研修生 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 小計 | | 1 | 8 | 1 | 23 | 1 | 8 | 6 | 10 | 53 | 2 | 25 | 8 | 8 | 22 | 15 | 2 | 5 | 3 | 3 | 1 | 2 | 36 | 12 | 153 | 201 | 375 |
| | | | | | 38 | 1 | 4 | 3 | 7 | 25 | 2 | 15 | 8 | 21 | 6 | 3 | 8 | 4 | 27 | 1 | 137 | 174 | 201 | | | | |
| 合計 | | 0 | | 24 | | 9 | | 69 | | 14 | 27 | 30 | 29 | 17 | 22 | 3 | 3 | 3 | 0 | | | | | | | | 375 |
| | | 9 | | 38 | | 5 | | 35 | | 12 | 16 | 29 | 17 | 17 | 17 | 3 | 3 | 9 | 1 | | | | | | | | 174 |

上段は男性、下段（網掛）は、女性を示す

岐阜大学留学生センター紀要 2017

執筆者

| | |
|------|---------------------|
| 土谷桃子 | 日本語・日本文化教育センター教授 |
| 田辺淳子 | 日本語・日本文化教育センター非常勤講師 |
| 秋山容子 | 日本語・日本文化教育センター非常勤講師 |

編集委員

| | |
|------|------------------------|
| 森田晃一 | 日本語・日本文化教育センター長（編集委員長） |
| 橋本慎吾 | 日本語・日本文化教育センター教授 |
| 土谷桃子 | 日本語・日本文化教育センター教授 |
| 吉成祐子 | 日本語・日本文化教育センター准教授 |

●編集後記

今号の発行時点では、すでに本センターは留学生センター改め、日本語・日本文化教育センターとなっております。しかし、内容としては2017年度の報告となっておりますので、「留学生センター紀要」としてしています。次号は「岐阜大学 日本語・日本文化教育センター紀要」として、引き続き、様々な活動報告、論文掲載など行いたいと思います。

岐阜大学留学生センター紀要 2017

2018年7月発行

岐阜市柳戸1番1

編集兼
発行者 岐阜大学日本語・日本文化教育センター
(旧 留学生センター)

責任者 森田 晃 一

印刷所 西濃印刷株式会社

岐阜市七軒町15番地

Bulletin of the International Student Center
Gifu University
2017

| | |
|--|----|
| Preface : MORITA Kochi | 1 |
| 1. Article | |
| TSUCHIYA Momoko | |
| Newspaper articles of <i>Ji-shibai</i> (Kabuki performed by local people) in Gifu prefecture in the early Meiji era | 3 |
| 2. Class Reports | |
| TANABE Junko | |
| A Class Report of “Oral Expression C” for Intermediate Japanese Learners | 19 |
| AKIYAMA Yoko | |
| A Class Report of “Composition C” for Intermediate Japanese Learners | 29 |
| 3. Annual Report (2017.4-2018.3) | |

Published by
Center for Japanese Language and Culture
(former International Student Center)
Gifu University, Gifu 501-1193, Japan